
鬼の面

有川

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼の面

【Nコード】

N0330W

【作者名】

有川

【あらすじ】

祖父母の住む田舎に越してきた高校二年生の綾は、蔵の中で鬼の面を見つける。面は江戸時代後期に町人の男によって、ある感情の矛先として彫られた面だった。約百五十年経った今、鬼の面は九十九神となって綾の傍に立つ。

蔵（１）

この町には古い家が多い。うちもその中の一つで、聞いた記憶が正しければ築百年は経っている。石垣のスロープをのぼった先、蛇行する踏み石を十歩くと、そこがわが家の玄関口だ。

私は玄関を出て、踏み石を十越えてスロープを下る。そして頼まれた通りに、バケツの水を道路に撒いた。

誰かがここを通るより、この水が乾く方が早いだろうな、と景色を見て思う。

小高い所にあるうちの前から、遠くに段々畑が見える。この季節では、青い田に風が走るのもわかる。……間を遮るビルが無いということだ。

よく言えばのどか、素直に言えば田舎。麦藁帽子に手ぬぐいを挟んで日よけにし、下着みたいな姿で歩くお爺ちゃんを頻繁に見る程度には、ここは田舎だ。

私は七月頭までもう少し大きな街に住んでいたけれど、父の海外出張がきっかけで、祖父母の住むこの家に越してきた。

詳しく言うと、同じ時期に祖父が倒れ、現在入院中。祖母一人の暮らしを不安に思った母が実家で暮らすことになり、私も連れてこられた。

祖父は長期療養になるそうだが、幸い気持ちは元気で食欲もあるようだった。

高校は編入手続きをして、自転車で三十分かかる学校に決まった。夏を見送って秋から、そこへ通うことになっている。

時期が半端だったこともあるが、祖母の家に私たち親子が転がり

込むためには、色々支度が必要だったのだ。

ふすまの枠にかけた制服のスカートを、指先でつつく。ワンピース型だからスカート丈は変えられないし、つるつるしたプラスチックのボタンは小学生みたいだ。

その下にシャツを着るらしいが、前の高校で着ていたものを着られそうだった。でも、気に入っているシャツの胸ワンポイントは、きつとずん胴なワンピースで隠されてしまっただろう。

どうでもいいことが、やけに悲しい。

祖父母のことは好きだけれど、想像以上に田舎暮らしは退屈だった。

楽しみにしていたテレビ番組も、こちらでは放送していない。コンビニより商店の方が近い。普通の美容院に行くには、電車に乗るか車に乗るかの二択だ。

一月過ぎすと、それまでとはすっかり習慣も変わってしまった。

毎日の暮らしをただ過ごす。一日は長くも短くも感じられて、均等に過ぎ去る。暇だという印象はあるのに、以前より携帯やパソコンに触る時間は激減した。

時間が経つというのは、こんな調子だっただろうか？ 春先頃の自分をやけに遠く感じながら、私は畳に寝そべった。

前の高校の友達から送られたメールに「今日はおばあちゃんに頼まれて、蔵の掃除」と返す。すぐに「蔵って何、お屋敷みたい！」と返信がきたが、この町ではさほど珍しくない。ただの古くて大きい物置だ。

今日は蔵を整理して、私達の荷物の代わりに廊下へ出されていた物を仕舞う。

自然と不満気に尖っていた唇を、意識的にキュッと引き結ぶ。私にとっても、本当はこの暮らしを退屈だなんて感じたくはないのだ。確かにまだこちらには友達もいないけれど、家族との時間は今まで以上にある。これはこれで、きっと純粹に満ち足りた生活なんだろうと、私にも分かっていった。

腹筋を使って身を起こす。まずは、湿気で首に張り付きそうな髪をゴムで簡単に結った。

私の部屋ですら暑いことから、蔵では当然汗をかくだろう。掃除用に汚してもいいＴシャツに着替え、蒸し暑い階段を裸足で下りていく。晴天の日の屋内は、床がひんやりして気持ちがいい。

「おばあちゃん、掃除用具借りるね！」

台所の方に声をかけてから、私は共用のサンダルをつっかけた。数年開けていない築百年の物置なんて、開ける前から埃っぽいのが目に見えていた。紙マスクを顔に掛け、覚悟をして戸に手をかける。

ぎ、と一度戸が引つ掛かると、隙間から薄暗い蔵の中が少し見えた。何故だか、暗さで色の鈍ったモノの山を見ると、薄気味悪い寒気を感じる。

戸はその後、少し力を込めたら簡単に開いた。

これで節句の人形だとかがこちらに向けて置いてあったら、私は母に応援を頼んでしまったかもしれない。しかしあからさまに「怖い」物は見当たらなかったため、一人で掃除を続行することにした。

開け放すと、太陽の光で中の砂埃が舞うのが見えて、思わず眉をひそめる。

視覚の問題か、マスクをしていても喉に何か張り付いた気がして、けんけんとむせた。カビか埃かわからないが、いかにも物置という臭いがする。

中は家電の箱から高枝切りハサミまで、雑多な物がひしめいている。奥の方には、古い棚がいくつかあるようだった。私はスペースを作る方法を思い巡らせながら、全体を見回す。

「自分の物じゃないのを整理するって、難しいな……」

引越してから、どうも独り言が増えた。そんな自分が、テレビと会話する近頃の母と似たようなものだど気付いて、ちよつと悔しい。似てきたついでに、母の掃除能力も今すぐ私に宿って欲しいものだ。母は家事があるし、体力仕事は私がやらなくてはいけない。

手前の物ですら薄く埃をかぶっていることを確認して、まずは換気しながらはたきを振るうことにした。心なしか、目がちりちりする。

舞う埃で涙目になりながらも、薄暗がりに慣れてくると、あることに気が付いた。

手前にあるのは実用的な物で、恐らく置かれたのは近年だ。しかし蔵全体の中ほどまで乱雑に置かれ、散在していて無駄スペースだらけだった。

そのバリケードのせいも、更に奥の棚は何十年単位で触っていない様子だ。きつと昔、少しずつ棚から物を出したのだろうが、そのスペースを再び活用していない。

つまり奥の棚には、かなり空気があった。奥からきちんと仕舞っ

ていけば、間違いなくこの蔵も使い易くなるはずだ。

目が慣れても、暗くて埃っぽい奥の方に一人入っていくと思うと、身が縮こまる思いだった。

蔵の掃除を任されたとはいえ、たぶんそこまでは期待されていないだろう。でも私はすっかり、完璧な整頓をした棚のイメージに取りつかれてしまっていた。

すごく汚いけれど、せめて今棚にまばらに置かれた箱達をまとめて端から並べたい。それで残りスペースに、今足元に転がる記念品だとか触らなさそうな物を入れていく。

それだけでどんなに片付くだろうと想像すると、もう私は隙間から奥へと向かい始めていた。やると決まったら、きちんとしていたい性分なのだ。

一応はたきを持って奥に潜り込んだものの、細かい砂埃で真っ白になった棚の前では無力に思える。振るったら、尋常ではない埃が舞っていつまでも終わらないんじゃないだろうか。濡らした雑巾が要る。

「いやあ……これはきつつい……」

思わず小声で感想を漏らしたくなる。人差し指を軽く棚に乗せたら、モフツとした感触が伝わったのだ。これは間違いなく、何十年レベルの埃だ。

持っていたはたきを、ひとまずジャージのお尻側のウエストゴムに挟む。

蔵の奥は狭く、乱雑なせいで足場の確保もギリギリだったり、胸

のあたりがつつかえたり、通る場所によって体勢を変えなければならなかった。

私はもうバケツに水を入れに行きたかったのだが、引き返そうにも方向転換が出来ない。空きスペースを求めるうちに、体はどんどん奥へ進んでしまっていた。

やっと向きを変えられる場所に到達して、蔵の入口を見ると、物に阻まれて随分遠く感じる。少し不安な場所ではあるが、辛うじて見える日差しの強い外とセミの鳴き声が私に現実感をくれた。

妙な不安を感じても、ここはただの物置。実際は何も起こるわけではない。

はからずも行き着いた蔵の最奥をじっくりと見渡す。一番奥の棚は、置かれているものが片手の指の数程しかない。

……手はもうどうせ汚れてしまっている。簡単に品物を確認して、捨てるべきじゃないかと判断したものは祖母に見せよう。

まず棚の下段に寝かせてあった、朱色の紐で編んだ竹箒。いつもの物なんだろう、触ったらぼろぼろと柄の表面が削れそうだ。

「この蔵を掃くにしたって、途中で壊れそう」

独り言と共に、内心で廃棄。と呟いて後ろの帰り道へ立て掛ける。続いて三つ並べて置いてあった木箱。箱はとっくの昔に虫に食われたような汚さだったが、蓋をつまみあげると中身は全て陶芸品だった。価値がわからないから、これは片付いてから確認してもらおうと判断。そのままにした。

次の箱は、紐がかたく結ばれていて開けられない。持てる程度の

軽さだったので、陶芸品の横に置く。

最後に、一步奥の平たい木箱を手を取った。墨で蓋に何か書かれていたけれど、達筆で私にはとても読めない。一応紐で封がしてある。

紐は飾り程度の蝶々結びだったので、埃が飛ばないよう息を殺してするりと解く。結び目の中だった部分だけが鮮やかな色をしていて、なんだか触ってしまったことが申し訳ない、と反射的に思った。何十年という時間の所業に、十七歳の小娘が手を加えたのだ。

しかしそれは、この後の掃除を思えば言っても仕方ないこと。未来永劫このままになんてしておけないのだから、私はこれらに触ってもいい。

ためらわずに箱を開けて、私は悲鳴をあげたいくらいどきりとした。

木彫りの、鬼の面だった。

蔵（２）

すぐに鬼だと分かったのは、面の輪郭から出る角が真つ先に目に入ったからだ。額から頭上の方へ反るようにして、十センチほどの大きな角が彫られている。

そしてその面の顔は左右非対称に歪み、凄まじい形相をしていた。

一目見た瞬間に総毛立ったというのに、どくどく打つ心臓を抱えたまま、私はいま鬼面を細部まで見つめている。

粗削りというか、いわゆる能面のイメージであるオカメのように、滑らかな表面ではない。絵に例えるなら、荒々しい筆のタッチが残っているようだ。

何か塗つてあるのか、先程の竹箒と違って崩れそうな印象はない。ほんの少し飴色になっている。

「はあ、びつくりした……」

怖いはずのものを観察してしまうのは、恐怖を取り払うための人間の本能かもしれない。ともあれ、一分二分と経てば気持ちちは相当落ち着いた。

面をそつと手に取る。裏側には赤い塗料が厚く塗られて、表面よりつるつるしていた。右下に小さく「二十」と書かれている。

私は何の気なしに、面の穴から蔵の外を覗いた。こんな小さな穴では見えづらいし、視界が暗い。つけるものではなく、鑑賞用なんだろうか。

「おつ、と」

面を箱に戻すと、目の前が強い光を見た後みたいに赤暗くなって、膝から力が抜けた。立ちくらみだ。

棚の埃っぱさも忘れて、咄嗟にもたれ掛かる。それでも意識が朦朧として、私は結局しゃがみ込んでしまった。

何秒か目を閉じたまま深呼吸をして、立ちくらみの原因を考える。睡眠時間、栄養、どれも祖父母の家に来てからの方が充実しているし、すぐには思い当たらなかった。

薄く目を開け、荷物の隙間から差し込む外の光をぼつと眺める。すると、その微かな光がゆらいだ気がした。

はっとして顔を上げる私の視線の先で、蔵の扉が閉まり始めていた。

「えっ、ちよっ、やだ……！」

慌てて荷物を支えに立ち上がったが、急に動いたせいでまた、くらりと頭が重くなる。風が吹いたか、と反射的に考えた。しかしそれと同時に、少しも揺れない庭の木と、妙にゆっくり閉まる扉に恐怖を感じた。

重たい音を立て、ついに蔵の中は真っ暗になった。

ぴたりと停止した私の耳には、紙マスクにこもる自分の浅い呼吸しか聞こえない。扉が閉まったくらいで、セミの声は聞こえなくなるだろうか、と考えると余計に恐ろしくなる。私がもし息を止めたら、蔵は無音になってしまう。

さっきから震える足を動かそうと意識しているのだが、根拠の無い「動いたら扉を閉めた誰かに見つかる」という脅迫じみた考えが

拭えなかった。

暗闇と張り詰めた神経は、感覚を普段より鋭くする。

ウエストゴムに挟んだはたきの先に、何かが触れたような気がした。

それで堤を切ったように、すくんでいた感情が爆発した。

正直詳しくは思い出せないが、私は絶叫して手探りで狭い蔵の奥から抜けだし、蔵の扉を叩いたらしい。何故か開かなかったことそのものへ疑問を感じることもなく、がむしゃらに叩いた。その辺りはよく覚えている。

自分が騒いでいるので、蔵に近寄る足音には全く気が付かなかった。突然明るくなって、体を預けていた扉が前に動き、へたりこむ。

「綾、何してるの……」

私を蔵から助け出したのは、買い物から帰った母だった。母は困惑、不審といった決して穏やかではない表情だったが、私は安堵のあまり口をぱくぱくさせる。私が涙で顔中濡れていたので、とにかく深く追及せず、抱きしめてくれた。

母の手には、私が蔵の奥で見つけたボロボロの竹箒が握られていた。その箒で、蔵の扉の取っ手に外から門かんぬきがされていたらしい。

箒は確かに、私の後ろに、戸が閉まる少し前まで、置いてあったのだ。

その日一番の鳥肌を忘れたくて、私はすぐにシャワーを浴びた。洗面所を出ると声をかけられ、居間でやけに甘やかされることにな

った。

母は近所の子供がいたずらしたに違いないと言って、ずっと怒ってくれていたし、祖母は美味しいお茶を煎れてくれた。

竹箒の件は不気味だったけれど、落ち着いてみると、閉じ込められたくらいで泣きすぎたかもしれない。他には何も怖いことはなかったじゃないか。恥ずかしくて、抱えた膝に口元を隠す。

「綾、ずいぶん、奥まで入ったのねえ」

独特なイントネーションで、祖母が首を傾げた。祖母は元々おっとりした性格で、ゆっくり喋るのは歳と関係がない。癒し系な可愛い人だ。

結果的に醜態をさらした私は、とりあえず苦笑いをしてみせた。

「うん。棚を整理して、物を詰めたかったんだ」

祖母はにこにこして私を見つめる。この件に関して、あまりの悲鳴に近所の人々が数名様子を見に来たらしい。その対応を祖母がしてくれたわけだが、私を責めも笑いもしなかった。

さすがに問は私のせいじゃないし、それだけなら怯えることでもない。事故だ。そう結論づけて忘れようと頷く私に、祖母が優しく言葉をかける。

「あの箒は、お寺で供養してもらおうね。大丈夫、大丈夫」

……自然にアレが霊的現象だと言われたようで、かえって寒気が振り返したのは黙っておいた。そういえば私はあの箒が蔵の中にあつたことを話していないし、重ねて怖い。老人の勘というやつだろうか。

しかし、私はもうあの竹箒が母の手の中にあるだけでゾツとしてしまうようになったので、供養するという話は有り難かった。

今日はもう十分疲れていたけれど、なんとまだ時刻は三時だ。

祖母はさっそく帽子と日傘を準備して、竹箒の供養に行くと言った。うちの前の坂から山道に入り、頂上付近にある寺へ向かうという。

真夏に老人の一人歩きはどうなんだと、おずおずと同行を申し出たら「綾はダメ」とはつきりにこやかに言われてしまい、ニュアンスが怖くて大人しく受け入れた。

母が家事をするなか、私だけ居間で一人手持ち無沙汰だ。頭にちらつくのは、竹箒に施されていた紐飾りの朱色や、蔵のことばかり。

蔵といえば、私は奥から脱出するとき、かなりの数ダンボールを落下させたんじゃないだろうか。というか、はたきも掃除用具も恐らく全部蔵の中だ。

掃除を任されたのに、かえって荒らしてしまった。

そのうち取りに行かなくてはいけない。今日はまだ明るいし、あの箒ももうない。

もう一度蔵へ、と自然に考えた。しかし、一時間前に騒ぎを起こしたばかりでまた蔵に入ったとあっては、次は変な虫を見たって悲鳴をあげるわけにいかない。でもたぶん、それは無理だ。サイズによつて程度はあるけど虫は無理だ。日を改めよう。

清々しく諦めて、居間の畳に仰向けになる。蛍光灯を直視して、なんとなく左手で目を覆った。

あの鬼の面はどうなっただろう。手で覆った時の視界、というか

感覚で、ふと面のことを思い出した。

間違はなく、箱には仕舞えていない。紐を結んだ記憶がない。立ちくらみがして、扉が閉まって……私はいつまで箱を持っていただろう。

脱出がなりふり構わずで、あちこち体当たりした覚えがあるだけに不安だ。木彫りの古い面なんて、落としたら割れてしまいかもしれない。

今まで数年に一度会っただけだった祖母には、まだ多少遠慮がある。それだけでも心苦しいのに、優しさに対して何も返せていないのが嫌だった。

私が今一番怖いのはあの簞だ。それはもう無いんだから、大きくて古い物置をまた掃除するだけ。

そうして自分に言い聞かせて、私はまた蔵の前に立っていた。

蔵（3）

つい先程振りの蔵の中は、予想通り私が荒らした痕跡が残っていた。バリケードが少し崩壊しているし、掃除用具を入れてきたバケツは蹴り倒されている。

一度閉じ込められた怖さと蔵への慣れがないまぜで、不思議な気持ちだ。心許ないが、中に入れないほどじゃない。

とりあえず今回は、突然の暗闇対策に懐中電灯を用意。悲鳴対策には大きな飴玉を二つ三つ用意した。

せめて崩した荷物達の天地を揃え、持ち込んだ掃除用具回収、鬼の面を元通りに仕舞う。これだけは今日やることにする。

本当に必要最低限で、それでも掃除開始前より床面積が狭くなっているのだから情けない……。

大体の作業は、一時間もかからなかったと思う。蔵の奥に行くための隙間も再発掘して、残すは鬼の面のことだけだ。

さっきのパニックは、もしかするとこの隙間が狭すぎるのが原因かもしれない。いかにも逃げ場が無いという感じで、この体勢で非常事態になったらと思うと冷や冷やした。

一番奥の棚が見え始めた。ポケットから懐中電灯を出して、照らしながら近寄る。

紐が床に落ちていた。面の箱に結んであった、飾り紐だ。やはり私は慌てて放り出してしまったらしい。もう目前だったので、懐中電灯は消して奥のスペースに入る。

かがんで紐を拾う。そのまま箱、蓋、とぶつぶつ言いながら手に取っていくが、肝心の面が無かった。

無意識にどこかに置いたか、と左右の棚を確認しながら立ち上がる。中腰の段階で、嫌な予感で満たされて顔がつい歪んだ。

無い。箱はあるのに、面は近くに無い。

今までの人生、ありきたりな事しか体験してこなかった私に、なんで今更こんな事が起きるんだろう。竹箒の瞬間移動も怖かったが、今度は恐ろしい顔の面だ。冗談じゃない。いや、怖い以前に、客観的に見たら私が面を紛失してしまった状況じゃないか。

黙ってごちゃごちゃと悪い考えを回していると、私の背後から男の声がした。

「捜し物はこれか」

誰もいないと知っているから、私の空耳かとも思う。でもそれにしてはくつきりと耳に残って、見ない方がいいという意に反して、振り返ってしまった。

私は身を退いたのに、顔のすぐ前に例の面があった。

歯を食いしばるようないびつな口と、見開かれた目に空いた覗き穴の奥で鈍く光る、誰かの目。

息と一緒に飴玉が喉に落ちて、叫ぶ余裕は無い。ぐ、と微かな呻き声だけ音になって、声を出すタイミングなど見失ってしまった。

面の顎を掴む手がある。当然腕が続いて、体は和服を着ている。面に合わせた鬘かつらなのか、茶というには赤いばさばさの長い髪が、面の後ろに流れていた。

自然と息を殺すように、私はただただ動きを止めている。

男は反応が無いと見て、私に近付けていた上体を面ごと退く。そして私がついさつき体の前で構えた手に「それとも、こっちか」とからかうような声音ではたきを握らせた。

指先の神経が確かにはたきの感触を伝えて、じわじわと脳が男の存在を認める。

震えた息を吐いたら、力が抜けて尻餅をついた。面の向こうで、男が笑った気配がする。

「もう悲鳴はあげないのか」

男が顔の前に構える面が少しだけ下げられて、一對のぎょろりとした目が私を見下ろす。

残念そうとも、面白がつているとも取れる声だ。少なくとも、優しい安心するような雰囲気ではない。

更によくよく見れば、鬘としか思えない赤髪はどうも頭に植わっている。そして前髪の間から、面と同じような角が二本、天に向かって伸びていた。

男の外見は、普通の人間ではない。それくらいの判断は私にも出来た。

心臓が胸全体で、痛いくらいの鼓動を打つ。黙って私を見ている男の顔から目を離さず、床を擦るようにじりじりと退路へ向かった。あの隙間に戻るにはむしろ男の脇を通らなければ、近づかなければならないのに、この時の私は無心で動いていた。男に背中を向けないという、なんの強みもないお粗末な行動だ。

男は完全に面を下げて、不思議そうに私の馬鹿な動きを目で追っている。

私はこれでも真剣で、いつ男が豹変して私を追いかけてくるのかと想像しては、心臓を震わせていた。しかし、私が帰り道の前でゆっくり立ち上がっても、男は何の邪魔もしてこない。

今だ！　と思った瞬間、隙間に身を滑りこませ、私はダンボール一つ落とすことなく蔵からの脱出に成功した。

暑い外に飛び出すと、どっと冷や汗が吹き出したが、とにかく蔵の扉を閉める。持っていた鍵ですぐに施錠したが、さっきの脱出劇が嘘のように、手は震えてもたついた。

蔵での二度目の出来事は、さすがに母にも祖母にも話さないことにした。色々な意味で、とても言えない。

それに、家族に話さないと決めて何でもないふりを貫いたら、あれは夢だったんじゃないかという気までしてきた。私が男と会話をしなかったから、余計にだ。

おぼろげに思い出す男の顔も、恐怖体験にしてはきれいすぎたように思う。目が怖かった記憶はあるが、大きな目といえはいわゆる美形の指標の一つだ。竹箒の怖さと欲求不満が何かで、変な白昼夢を見たのかもしれない。

また今度、蔵の奥で面を回収しよう。……次は母も一緒に。

未だに痛む喉だけは、私が何かの理由で飴玉を丸呑みした事実を訴えていた。

普段より気持ち長めに居間で過ごした私は、お風呂の支度をするために一人階段を上る。

昼間に一度入ったけどその後蔵で汗をかいたし……いや、蔵に行ったかどうか曖昧だけど、とにかく汗はかいた。

祖母に与えられた私の部屋は、二階の廊下突き当たりの部屋だ。家が古いことや田舎であることは関係あるだろうか、どこであっても慣れた以前の家よりは暗い。スイッチを入れると、一秒の間を置いた後、点滅しながら部屋が照らされた。

すると、さっきまで何もなかったはずの背後に気配を感じる。私でも気が付くはずだ、本当にすぐ後ろ、一步下がったらぶつかりそうな場所に誰かがいるのだ。

急に振り返る勇気がなくて、足元に視線を落とす。見る気はなかったのに、それで背後の人物の足も見えてしまった。草鞋^{わらじ}を履いた、男の足だ。

勝手に距離を取る足と、振り向こうとする体がもつれて、こけた。畳に後ろ手をつく。

予想通り、昼間に蔵で会った謎の角男だった。傷んでいそうな赤茶けた髪の間から、角がしっかりと覗いている。

「うわっ、あっ」

叫びかけて、慌てて口を押さえる。男はそんな私をただ見ている。ここは蔵じゃないのになんで、と事の理不尽さに半泣きになりながら、懸命に頭を働かせた。

二回とも私の不意をついておきながら、わざわざ存在を知らせて危害を加えてはこなかった。男は、話し合う気があるのかもしれない。

渴いた喉をなんとか動かして、やっと一言目を口にする。

「……あなたは、鬼なの？」

馬鹿な質問をしただろうか、男の目の些細な動きに息を詰める。

「私は鬼ではない。^{オモテ}面だ」

意外なほどあっさりと返答された。男から目立った感情は読み取れない。

「おもて？」

「お前が蔵で見た、鬼の面だ^{オモテ}」

男はあの木彫りの鬼面の話をしている。面という漢字は「おもて」とも読むな、とやっと頭の中で繋がった。

目の前の男は自称「面」なのだが、別に例の面に顔がそっくりという訳ではなかった。むしろ、面は恐ろしいが男は美形の部類だ。髪や変な和服をどうにかしたら、文句のつけようがない。

私は無遠慮に男の顔を観察しているし、男は土足で不法侵入している。お互いに気を悪くさせるようなことをしているが、絶妙なバランス感で、この場は何も起きていない。

しかしこの二者では、部屋に上がり込まれている私が圧倒的に崖っぷちに立たされている。男の目的がわからないからだ。

「それで、鬼の面さんは……」

男が私に危害を加える気分に傾かないよう、慎重に言葉を発する。早く事態をなんとかしたかったのだが、男は私の質問を遮った。

「二十枚目に彫られた鬼の面、という意味で名はキハツだ」

二十、鬼の面。キーワードが一瞬頭を占めて「鬼^{キハツ}二十」という文字列になる。こんな当て字のような想像で合っているのかは不明だけれど、男は私に名前を名乗った。

つい困惑を態度に表してしまった私に、キハツという男が一步步み寄る。保たれていた距離が壊されて、私も一歩分後退した。男の黒い瞳にはやけに迫力があり、直視されると身動きが取りづらくなる。

「綾、お風呂に入るんじゃないの」

一階から、母が私に呼び掛ける声がした。

それと同時に、目の前の男は瞬きする間に視界から消えたのだ。た。

蔵(3)(後書き)

綾視点では「おにのめん」ですが、実はタイトルの読み方は「オニのオモテ」です。

面と男（１）

あの鬼二十と名乗った男は、自分を面だと言った。

文字通りに捉えすぎると混乱するが、人間でないことだけは重々理解したつもりだ。外見に言い訳をつけたって、お釣りがくるくらい非現実を見せつけられた。

問題は、あの男が再び現れる可能性が高そうなこと。考えるほど、あれつきりでは済まなさそうなのだ。

一つめ、男が二回も現れた理由が判明していない。つまり目的や用件があったとしたら、それはまだ果たされていないという事になる。

二つめ、もう会う気がない相手なら名前を名乗らないんじゃないか？ 例えば泥棒は、出くわしても自己紹介なんて普通しない。

これだけでも、男がまた姿を見せる可能性は十分にある気がする。

鬼の面はまだ蔵にあるのだろうか。なににせよ、蔵に鍵をかけても部屋に現れたのだから、男はどこにでも行けると考えておいた方がいい。

長風呂でここまで整理して、ふとある事に思い至る。男が風呂場に現れなくて良かった。

部屋に戻る時は少し緊張したけれど、電気をつけて十秒様子見しても何も無い。

それならもう寝てしまおうと、早々にベッドへ入った。今日に限っては、暑くてもタオルケットを頭の上までかぶることにする。

……疲れていたせいか、夢も見ず一瞬のまばたきみたいに目が覚めた。

いや、実際長時間は寝ていないのかもしれない。タオルケットをかぶったままだけれど、早朝の雰囲気が出た。

横にあった携帯を開くと、時計は朝五時過ぎと表示する。睡眠時間が足りていても、用が無ければちょっと起きる気のしない時間だ。

ため息と一緒にばさりとタオルケットを跳ね退けたが、それはすぐに引き寄せることになる。

視界の端、ベッドから一メートルくらいの所に、あの男が立っていた。

「きつ……」

「鬼二十」

私が言い淀んだのは、名前を忘れたからではない。驚きと、一瞬後に湧いた呼んでいいのかという躊躇いだ。

男がどういふつもりなのか、表情からはわからない。タイミングからいって、恐らく呼ばせるために言っている気はした。

「……鬼二十さん」

呼ぶと男は頷いて、こちらに近寄ろうとする。私も慌ててベッドの奥に逃げて、鬼二十に待ったをかけた。

「あの！ 出来たら、お願いだから、お話はその位置からお願いします！」

鬼二十は少しだけ面食らった顔をしたが、納得してくれたらしい。どかりとその場に腰を下ろした。

昨日と同じように土足だったし、胡座や腕組みまでして、かなり態度が大きい。心なしか顎を上げているので、余計にそういう印象があった。

「それである、鬼二十さんはなぜ朝から私の部屋に」

ベッドの上で正座をして、反応を窺いながら質問をする。私の方がベッドの分高い位置にいるのに、まるで彼の家来みたいだ。下手にでる私が可笑しいのか、もしくは質問の内容に対してか、鬼二十は鼻で笑って意地の悪い笑みを浮かべた。

「お前に見えないだけで、私はずっとここにいたぞ」

「ずっと、って」

「昨晚から」

その爆弾発言に、私の顔が引き攣る。姿を見せないことも出来るなら、私には何の対策も立てようがなかったんじゃないか。

というか、私がこんなに警戒していても、既に同じ部屋で一晩過ごしていたなんて酷い笑い話だ。

鬼二十の存在は、幽霊というより妖怪という言葉がしっくりくる。幽霊といえは怨恨や未練を連想するが、妖怪といえは化かすもの。思えば最初から、私はからかわれていたんだろうか。

少しずつ腹が立ってきて、私の言い方にも棘が混じる。なんで、

面に遊ばれなきゃならないんだ。

「もしかして、私を蔵に閉じ込めたのもあなた？」

私の態度が変わり始めても、鬼二十は鈍感なのかどうでもいいのか、まるで気にしていない。

「あれはお前が箒を捨てようとしたから、箒がやったんだろう。あれも中々古いやつだった、そろそろ動いてもおかしくない」

しれつと答えられた内容は、私にとっては一つ一つ問い詰めたことばかりだ。古いから動いてもおかしくない？ そんな事を言い出したら、町中の家が大移動を始めてしまう。

大体箒に対して「ぼろい」とかは言ったかもしれないが、捨てるとは一言も言っていない。……捨てる気だったけれど。

私は胡散臭いものを見る目で、鬼二十に訊く。

「捨てようとしたかなんて、分かるの」

「普通分かる」

常識を語るようにきっぱりと言い切られても、馬鹿にした目をされても、私には納得いかない。鬼二十はわざとらしく息を吐いて「随分時代は変わったようだが、今の娘は付喪神も知らんのか」と、また私を馬鹿にした。

別に現代の女子高生は、妖怪の知識なんかなくても困らないんだ！ と不満たつぷりに睨んだが、鬼二十は興味の無さそうな顔をしていた。腹立つ。

会話に少し間が開いたので、鬼二十を眺め回す。顔が良いのは承

知しているけど、もうとにかくケチをつけたい気分だった。

和服は衿の合わせがだらし無さすぎて、私がもし立ち上がったら腹が見えそうだ。袴と言っているのかわからない奇妙なズボンは、腰のところで太い縄を使って締めている。あと全体的に、端が擦り切れていて正式な場に着て行けるような物ではない。

じろじろと端まで眺めても、結局服にしか文句が言えなかった。軽く咳ばらいをする。

ここまで時間を使っても重大な話はしていないし、手出しもされていない。鬼二十がした事といえば、私の無知を揶揄したくらいだ。正直、崇高な目的どころか大した用件も無いんじゃないのかと疑わしくなってきた。

「……鬼二十さんは、別に私や家族を殺そうとか、そういうつもりじゃないんですね？」

畏敬の類を伴っていない、私の中途半端な敬語にも無理が出ている。

これだけは確認しておかないと困るのだ。この男が私を馬鹿にしているのがいまいが、重要なのはここに尽きる。

私の視線をうけて、鬼二十は軽く肩をすくめた。

「殺して何になる」

……妖怪というのは、人の神経を逆なですることしか言わない生き物なんだろうか。「あついえそんな滅相もない」とは間違っても言いそうにない。少なくともこの人は。

部屋の真ん中を陣取る傲慢な妖怪は、私が質問をやめると黙ってこちらを見る。一向に自分の用件を話すそぶりを見せない。

「じゃあ、あなたは何のためにここに？」

私はタオルケットを握り締めて、あなたが言わないのならばと核心を突いた。昔からあっただろっ面の妖怪が、なぜ今になって私に付きまとうのか、その理由だ。

退屈そうにしていた鬼二十の目がまた、強い力を持って私を見る。睨まれているわけじゃなく、ただ見られているだけなのに、最初のように「怖い」と感じた。私が身構えている様子を数秒眺めてから、鬼二十はそのままにやりと笑う。

答えない。

得体の知れなさに、背筋が少し冷えた。こういう感覚を与えられと、この人は人間じゃないと痛感する。

人間の不審者相手だったら、怖さに任せて少しくらい罵倒してしまったかもしれないが、鬼二十相手にはそんな気にならない。彼を本当に怒らせるのは遠慮したい。

私が黙ると、鬼二十は一貫したマイペースな振る舞いを続けた。それも黙って見ていると、何を思ったのか畳でくつろぎだす。

まさかとは思うが、この部屋に居着く気なんだろうか。

我ながら嫌な想像だが、間違っている気がしないから困る。

私が蔵で箱を開けてしまったことが原因だったとしても、いくらなんでもそれは無理だ。母や祖母に「わが家は鬼の面の妖怪に取り憑かれています、そいつは私の部屋にいます」なんて、体が爆発したって言えない。

かといって、男の妖怪との同居を受け入れる気もない。

「……私の部屋から出ていって下さい」

「ほう、では家主に挨拶でも」

一見私の真剣な頼みを聞き入れたように、鬼二十はすぐ立ち上がる。しかし、口にする内容がピンポイントで私が一番避けたい事だなんて、なんてたちの悪い人なんだろう。

「待って、やめて」

不本意だ。けれど、こう言うしかない。

鬼二十は呼び止める事を予想していたように、自然に元居た場所に腰を下ろす。そうして私を見上げて、微かに上に立った顔をするのだった。

面と男(2)

だし巻き卵を口に入れている私に、母が首を傾げる。

「どうしたの。具合悪い？」

声をかけられて我に返り、周りからの視線に気が付いた。考え事で頭がいっぱいで、表情は硬いし口数も少ない。心配させてもおかしくなかった。

眠くて、と曖昧に答えた。二人はくすくす笑って、いつもの朝食での会話に戻る。

あの後、さすがに目の前でもう一度眠る気にはなれなくて、私は六時前から一日の活動を開始することにした。

机周りの整理をしながら、鬼二十が変な事をしないか気をつけていたのだけれど、いつの間にか部屋には私一人だった。

また姿が見えないだけでここにいて、とかいう卑怯な手を使われている可能性がある。しかし私も鬼二十の視線が無い方が動きやすいのは確かなので、行動を起こすべく立ち上がった。

まず、私の部屋にあの面があるかどうか捜した。ベッドの下やタンスの上、押し入れも掘り返したけれど無い。蔵の中か、鬼二十が持ったまま消えたかしたようだ。

幻のようだけどインパクトがある未知との遭遇を経て、そう簡単に頭は切り替わらない。

ノートパソコンを久しぶりに立ち上げる。検索ボックスには「つくもがみ」「鬼面」「妖怪」等、昨日から縁の切れない言葉を次

々入力していった。

そこから分かったことは、付喪神は古い道具に命が宿ったものを指すこと。九十九とかけて、大体百年くらい経ったものがそうなるという目安がある。

鬼二十の面はそんなに古い物だったのかと、正直驚いた。

テレビでは古墳時代の何かが出土、なんて耳にしても、現実味がなくて何も感じない。私の手に触れるものは、みんな古くてせいぜい昭和のものだと無意識に考えていた。

家がそもそも築百年だということも含めて、まるで意識の外だった。

あと、鬼二十の面は変わったデザインだ。

有名な鬼の面はいわゆる般若だというのも今日知ったけれど、二つは全然違うジャンルの物に思える。

彩色を前提としていないからか、鬼二十の面は前髪の手が流れて彫られていたと思う。般若は、真ん中分けの髪が後から描かれている。

髪表現のしかただけでも違うが、とにかく鬼二十の面に似たものはインターネットでは見つからなかったのだ。

「妖怪」は検索した事を後悔した。怪談話が大量にヒットして、うっかり読んでしまったから。

それで朝食を食べて今に至るんだけど、部屋に戻るのに心臓がいちいちフル稼働する。昨日まで退屈だと思っていたことは平穩の間違いだったと、誰かに懺悔したい。

夜とは違って、私の部屋にも窓があるから暗くはない。一息ついてから、すぱんと一気に引き戸を開けた。部屋に誰もいないのを確認して、ほっと胸を撫で下ろす。

「……よかった、いない」

「残念ながら、いる」

間髪入れずに口を挟んだ鬼二十が現れたのは、私のたった十センチ前だった。漫画だったら間違はなく、私は口から心臓が出ている。

「ふ、普通に、出てきて！ 後ろに立つのも急に出てくるのも、やめてよ……！」

一歩下がって鬼二十を見上げ、割と真剣に懇願する。

鬼二十は承知したのかしていないのか、はは、と短く笑い飛ばした。承知してくれていない気がする。

鬼二十にすんなりと目下扱いされるのが嫌で、私からは敬語をやるように意識している。今のところ全く気にされていないようなので、このまま個人としての尊厳を回復したい。

私が部屋に入るより先に姿を見せた鬼二十は、当然のように先に部屋の奥へ進み、ベッドに腰を下ろした。マットレスのバネが気に入ったのか、右手で感触を確かめている。

部屋の物に意識がいつてくれるのは、私に注目されるより幾分マシだと思った。

ほとぼりが冷めるまで、私が自分の部屋での滞在時間を減らす手もあるな、と考える。私に危害を加えないなら、いつか消えるまで

なるべく関わらずにおくのだ。

私は昨日に引き続き、蔵を掃除しに行くつもりだ。まだ八月はあと三週間残っているけれど、荷物整理は学校が始まるまでに終えたい。

鬼二十の位置からはこちらが見えるので、仕方なくタンスの陰に隠れて服を着替えた。髪も結って、もうこの部屋に用事は無いはずだ。

そのまま何も告げずに行こうとして、ぴたりと足を止める。一つの懸念事項が頭を過ぎったからだ。

鬼二十の方へゆっくり視線を向ける。基本的に退屈そうな顔ばかりしている鬼二十だが、微かな感情を見出だしてしまうのは私の妄想だろうか。

例えば今は「なんだよ」と言わんばかりに感じられる。

「あの蔵、他にはもう九十九神になってる物、無い？」

「知らん」

私なりに、頼りたくない相手にそんな事を訊くのは勇気がいった。しかし即答、それも安心できない答えて打ち砕かれる。

また怖い思いをするのは嫌だ。鬼二十は危害を加えないらしいけど、別の妖怪もそうとは限らない。大体また鬼二十のように部屋まで押しかけてきたら、いよいよ妖怪ルームシェア状態じゃないか。

悶々と悩む私を前に、鬼二十は人のベッドを勝手に使ってくつろいでいる。そして視線だけよこして、にやりと笑う。

「なんなら私がついて行って、見ていてやろうか」

は？　と言いつことになるのをなんとか堪えて、鬼二十をまじまじと見る。まあそれは薄暗い蔵の中でも一人じゃないから安心ね、と想像しかけて掻き消した。

妖怪が怖いという話なのに、自分から妖怪を連れていって二人きりになるだなんて、本末転倒だ。慌てて「結構です」と鬼二十に背を向ける。

どんな表情かはわからないが、相変わらず人をからかうような調子の声が向けられた。

「今度は背後にも気をつけるんだな」

……嫌なことを言われて、今朝ネットで見た怪談話が頭に蘇る。恨みがましく睨んでやろうと振り返ると、鬼二十は予想通りの意地悪な笑みを浮かべていた。いつそ泣きたい気分の私を鼻で笑って、懷からあの面を取り出してみせる。

「持って行け」

鬼二十の姿は見えなくなり、ベッドの端には鬼の面だけ残された。たぶん、見えないだけでいるんだろう。

あの人なんていちいち偉そうなの、と不満を持ちながらも、……私は面を手にとっていた。

蔵では、まず奥に入って昨日再度放置した面の箱を確保した。中に面を戻して、数秒鬼二十を待ってみる。ついでに面に向かって、

賽銭箱を前にするように柏手も打った。

「……拜んでも何もないぞ」

はつとして振り返ると、またしても鬼二十は背後から現れた。心底呆れた目をされて、そういえばこれでは拜んでいるみたいだと後悔した。

「恥ずかしさを誤魔化すために後ろから現れた事を批難したら、お前が普通に出てこいと言うから、入口の方から歩いてきてやったんだ」と返されて、ぐうの音も出ない。

「それで、どう。蔵の中に妖怪とか幽霊とか、いる？」

おずおずと話を持ち掛けると、鬼二十は目だけで周囲をぐるりと見てから、そのまま床に腰を下ろした。

不安そうにしているだろう私の顔を見て、鬼二十はため息をつく。

「いいからさっさと用事を済ませろ。何かあったら言ってやる」

……本当にこの人、いちいち言い方が引く掛かる。汚い床に座ったんだから、後で私のベッドには座らせないからな！ と念を込めてじと目を向けると、笑まれた。

なんだろう、きつと馬鹿にされたのに、少し心臓が跳ねた。

それから私は蔵の掃除に戻った。整理と並行するとはかどらないので、開き直って掃除できる場所は全て先に取り掛かることにしたのだ。

バケツの水を何度も交換して、あちこちの埃を拭って、時折鬼二十の方を確認する。鬼二十はそこに居たり、見えなかったりもした。

昼休憩を挟んで、午後もひたすら掃除だった。だんだん拭く場所が少なくなってくるのは、案外気持ちがいい。

夕陽もさしてきたので、一度奥へ向かう。赤い光にあてられて、鬼二十の髪がますます赤く見えた。

「私、部屋に戻るけど」

声をかけると振り向いて、黙って立ち上がる。

ついて来てもらったのは事実なので一応声をかけたけど、やっぱり私の部屋に戻るのか。蔵にお帰り頂く方向で、放って帰った方が意思表示は出来たのに、私は失敗したかもしれない。

ひそかにため息をついて、踵を返す。すると視界の端に、何か黒いものが動いた気がした。

私は凍りついて、鬼二十を振り返る。

「いま、そこ、何かいた？」

「百足だな、妖怪じゃない」

だから、しれっと答えられても、私には簡単に受け入れられない事がある。妖怪だけじゃなく、私は虫も苦手だ。

慌てて引き返して、怪訝な顔をする鬼二十と位置を入れ換える。ああもうどうしよう、と一人ぶつぶつ呟いていると、鬼二十が消えた。

まさかこのタイミングでいなくなったのかと、思わず拳動不審にもなる。きはつ、とその名を呼びかけた瞬間に、鬼二十は目の前に

再び現れた。

「な、なにして」

「捨ててきた。お前が騒々しいから」

私を見下ろす黒い瞳は、相変わらず面倒そうなままだ。でも今日のこの状況って、なんだか最初から最後まで、守られているみたいだ。

鬼二十に好かれているとは全く思わない。けれど本当にこの人は、私に危害を加える気はないんだなと感慨にふける。それで、鬼二十は何のために私に関わるのか。考えがそこに戻ってくる、どうしようもなくぐるぐると回る。

また姿を消す気なのか、私に面を持っていうように押し付けてくる鬼二十に、なにか声をかけたかった。

「ムカデ、ありがとう。どうやったの？」

「手で掴んで捨てた」

……本当に、私の部屋に入る前には鬼二十をきれいにしたい。

面と男(3)

きらきらした音が耳に刺さって、そこにやがて女性ボーカルの声も加わる。眠さで無意識に、タオルケットをかぶって防いだ。布越しに聴けば音は柔らかで、むしろ安眠を誘う。

「おい」

しかしタオルは引きはがされ、私はがさがさと揺り起こされた。何が起きたのかと目を白黒させていると、眼前にストラップを押し込みされた携帯が突き出される。

「これが煩い。なんとかしろ」

次に見た顔は、いつにもまして上から目線な鬼二十のものだった。実際、寝ている私を覗き込んでいるのだから、上からになって当然だけど。

ぼんやりと鬼二十の髪を見ながら、アラーム設定を守る携帯を受け取った。

何日か前から私は、九十九神だという妖怪の男と同じ部屋で生活している。それは私の本意じゃなく、男が出ていってくれないのだ。

鬼二十はたまに現れては気ままに振る舞い、私の蔵掃除には黙って同行した。こちらとしても、妖怪探知器兼、虫処理班として大いに助かっている。

だからといってこの先の同居を受け入れたかというと、そんな事

はない。その状況は蔵限定だし、未来のプライバシー丸ごと引き換えにするには、あまりに重いだろう。

今日は、母の運転で色々と買い出しの予定がある。携帯の目覚ましで起きるのは苦手だが、鬼二十が起こしにきたので間接的には成功だ。

よほど携帯の音が嫌だったのか、鬼二十はどこか不機嫌そうにしている。そういえば朝に鬼二十が現れたのは初日ぶりだな、と考えながら、私はベッドから下りた。

「あの、私着替えるから、消える術？ あれやって」

服を用意しながら、ぞんざいに指示をする。出掛けると言っても、行き先はホームセンターと地域のショッピングモールだ。適当に選べば良いのに、ここ数日部屋着だった反動で、ついお気に入りを手にとった。

その間も鬼二十の方から視線を感じたので、まだ見ている気なのかと肩越しに視線を返す。

鬼二十は背後の勉強机に腰掛けて、目を閉じる。

「……一つお前の勘違いを訂正すると、姿を現すのが言わば妖術。姿を見せないのは術でもなんでもない」

お前がこの机や寝台の姿を見ないのと一緒に分かるか、と説明する端からやる気をなくしていくように、抑揚が消失していく。被害妄想かもしれないが、気だるげにこちらを見る目が「推察しろ馬鹿」とても言いたげだ。

言われてみれば、本来存在しないものが姿を消しても、元に戻るだけか。

理解は深まったが、いずれ追い出したい鬼二十のことを知るより、貴重な朝の時間を大事にしたい。

「……なんでもいいから。鬼二十が居たら着替えづらい」

服を抱えて、さあ消えてくれと睨みつける。やりとりが長引くと分かっていたら最初から私が部屋を出たが、ここまできたら意地だ。

しかし鬼二十も素直には消えてくれない。黙って私を見つめた後、瞼を下ろして俯いてみせる。

「見るなというなら、こうした方が確実だろう」

「それ本当に確実か」と問い詰めたくもなかったが、埒があかないのでもう構わないことにした。鬼二十が目を開けないか、私が監視していればいい。

……そう思っただけで着替え始めたけれど、静かな部屋で自分が出す衣擦れの音を聞くうちに、何かを間違えている気がしてきた。

普通に脱いでるけど、すぐ前には目を閉じているだけの男がいる人間じゃないからいいという理屈でもない。

やっぱり私は、同棲を強いられて何かが麻痺してきてるんじゃないだろうか。恥じらいとか、色々と女子高生にまだ必要なものが。

「終わったか」

「……あ、もう少し」

苛立った調子で声をかけられて、慌ててキャミソールをかぶる。

くぐつて顔を出した時には、鬼二十は目を細めてこちらを見ていた。私はまだおへそが出ていたので、さつと服を引き下ろす。

この暮らしがまだ続くなら、部屋についたてを導入した方が、お互い譲らなくて済むかもしれない。

……私はなぜ同棲継続前提の出費を考えているんだろうと、虚しくため息をこぼす。そのため息に応えるように、鬼二十も小さく息を吐いた。

「そもそも、お前の派手な下着に興味はない」

「言われるほど派手じゃない……っていうかなに、いつ見たの!？」

鬼二十がぼそりと呟いた台詞が聞き捨てならなくて、しつかりと拾う。

派手と言われても、何を基準に言ってるのか疑問でしかたない。体育で何度も大勢で着替えたけれど、周り比べても浮いたことは無い。もし昔ながらのさらしや禪と比べて言っているなら、言い掛かりもいいところだと思う。

ちなみにいつ見たのかという問いには、律儀に「昨日まで見るなとは言われなかった」と返された。

見えないけどそこにいるとは、そういう事も指すのだ。

今更になつて、鬼二十がさっき言った「こうした方が確実」の意味を知る。そんなに気にするなら見張つたらいいと言っんだ。

状況がいちいち妖怪との新しい常識を通って発生するので、脳みそが余分に疲れる。大体、鬼二十が部屋に住むのをやめてくれれば万事解決なのに、なぜ変な回避策をとるんだろう。

ゆったりした五分袖のカーディガンを羽織って、支度はほぼ完了した。鞆に財布や携帯を詰めながら、鬼二十の方を見遣る。

「どうしたら、もううちに化けて出ない？」

久しぶりとも言える本題に、鬼二十の両目がぎらりと活きた気がする。面白そうな顔をしているが、いまいち鬼二十の感情のスイッチがわからない。

勉強机から下りたと思ったら、次の瞬間にはもう私の目の前で面を身につけていた。ずいど迫ってくるので、私は身を竦めてダンスにもたれ掛かった。

「この面を真つ二つにするか、焼いてみたらどうだ」

恐ろしい顔の面越しに、鬼二十が囁く。その声と内容で、私の中身が真つ白な空白になった。それだけ、耳に入った言葉は想定外で力強かった。

微動だにしない私に数秒付き合った後、ぶら下げた餌を遠ざけるように面を外して、薄い唇が弧を描く。

「させんがな」

「……………」

愉快そうな鬼二十に反して、私はきつと難しい顔をしていただろう。

鬼二十は面をこれみよがしに懷に入れると、姿を消した。私が一人、部屋に残される。

車の後部座席で、私はずっと鬼二十のことを考えていた。

どうしたら化けて出ないか、の問いに対して「面を壊せ」と言われるとは思っていなかった。

鬼二十は面の化身なのだから、面として壊れてしまえば鬼二十の存在は消える。そういうことなんだろう。でも、それを当の本人が私に教えてしまうのだから余計に胸が騒ぐ。

私の暴力で、損傷させて、鬼二十の存在自体を消すということ。……それって、人を殺すのと何ら変わりがないじゃないか。

鬼二十から面を奪ったとしても、私は彼の顔を見ながら面にライターを近づけられるだろうか。ハンマーか何かを振り上げる事が、出来るだろうか。

その行為をする自分を想像すると腕に緊張が走る。なぜだかそれを見る鬼二十の顔は、想像がつかない。

面はモノだし、生き物とは話が違う。そのはずなのに、鬼二十が存在する以上、それは私にとって殺人だった。

鬼二十を追い出すために、私は殺人が出来るか。自分に問いかける前から、薄々答えは分かっていた。

同居にはまだ反対だし、鬼二十はすぐ馬鹿にしてくるし腹が立つ。でも、恨みは一つもない。

私は鬼二十に刃を向けるのを望んでいない。想像しただけで、嫌な気持ちになるのだ。

帰宅して自室に入ると、鬼二十は私のベッドで横になっていた。

もう好き放題だなと呆れながら、買ってきたパンを一つ鬼二十に渡してみる。

どうしろと？ とばかりに私を見るので「妖怪ってご飯は食べられないの」と訊いたら、黙って口に運んだ。可能らしい。

私は畳に腰をおろして、鬼二十を見つめる。見慣れた奇妙な和服と赤い長髪と角が、現代の家具からは浮いている。当たり前のような顔をして私の部屋に居着く、異質な存在だ。

それを私が自然だと認めてしまったら、普通の日常が覆ってしまふ気がした。

頭では分かっているが、意思疎通のできる人のようなものを連日伴っていると、認識が混乱し始める。現に鬼二十はこうして食べ物まで口にする。私だけに見える幽霊や幻覚とは違って、確かに存在しているのだ。

独り言のような気持ちで、ぼつりと部屋に言葉を落とす。

「……今日はね、お母さん達と買い物に行ってきたの」

「そうか」

あっさりとパンを食べ終えた鬼二十は、指の食べかすをぺろりと舐めて、つまらなさそうに答えた。

私には面を壊せない。心の中で、再度復唱した。

私と、面（１）

何度か言い咎めたら、鬼二十はやつと草鞋で上がり込むのをやめた。

本人は、汚れないのだから問題ないと言い張る。だが、私は気になるので指摘する。そのうちに言われるのが嫌になったのか、以降部屋に現れる時は裸足だった。

少しずつ、面の妖怪は私の日常に侵食してきている。

私がやめたと訴えれば、口は悪いけど応える。私が困っていると偉そうだけど一押しの手助けをしてくれる。

出ていってくれないだけで充分迷惑で、私の部屋にいるための譲歩なんかにはだされてはダメだと思うのに、ままならない。

部屋の備品みたいに、鬼二十は当たり前そこにいる。すると不思議とこの一ヶ月感じてきた、一人の時間特有の倦怠感を感じなくなっていたのに気付く。

これでは、いまいち鬼二十を嫌えない。

どうしていいのかわからないまま、私は問題を先送りにして日々を過ごしていた。

今まで食事をしていたようには思えないけど、妖怪も食べ物を口にするのと分かった以上、つい気にしてしまう。さすがに母や祖母に養ってもらっている身なので、大それたことはしない。おやつ程度のもものを持ち込むだけだが、日に一度はそうしていた。

鬼二十は味や量には何のコメントも残さず、与えられた食べ物は全て食べた。

それが空腹を意味するのかは、はっきり言って判断できない。どれだけ間が開こうが、自分からなにかを食べたがることは無いのだ。

居間から戻る時に、お饅頭を一つ余分にもらってきた。タンスに寄り掛かっていた鬼二十に差し出して、食べるか尋ねる。鬼二十は今日も受け取って、二口で食べてしまった。

そのとき牙というほどではないが、少し立派な犬歯が覗いた。

動物は歯で主食がわかるというが、妖怪もそう思っていだろうか。だとしたら、一応人間の範疇の歯をしている。同じ雑食扱いしているし、今更肉食だとわかってても肉は差し入れできそうにない。

正面に座ってぼうつと眺めていると、鬼二十も視線を返してきた。

野生動物よろしく、基本的に向こうは目を逸らさない。最初の頃は先に目を逸らすのが怖くて、鬼二十の気がよそへ向くよう努力していたものだ。今では鬼二十が纏う人ならざる雰囲気にもすっかり慣れて、怖さはない。

ただあまりに長い睨み合いは、気恥ずかしくなってくる。一応顔の造りがきれいなので、そんな人を直視するには経験値が足りなかった。

食べ物を貢いで、見つめて、目を逸らす。私の一連の行動を訝しんで、鬼二十は目を細めた。

「なにか用か」

じろじろ見た私にも問題はあれど、人の部屋に居座っている身でこの態度である。片膝を立てて、亭主関白な親父のようだった。観察していたというのも何だか嫌だ。私は膝を抱えて、急ごしら

えで話題を作る。

「……鬼二十の面は、いつから蔵にあったの」

その質問は可でも不可でもなかったらしい。こちらの意図を浅く探ってくるような目も、すぐに伏せられた。

「あの蔵に最初に入れられた物の一つ」

蔵は家と同じ年に建てられたはずなので、百数年前にはもう存在していたことになる。そしてその日を、鬼二十は覚えているようだ。

「じゃあ、九十九神になったのも蔵に来る前？」

「いや。私はあそこで初めて姿をとった。一度目が覚めれば、それ以前の事も知っている」

鬼二十も多少思い出しながら話しているのか、普段の即答に比べて慎重だった。

少し追及してみたら、それ以前とは、面として生まれた瞬間からのことを言っている。どんな持ち主の手を渡ったかも、知っている口ぶりだ。

目の前のこの鬼二十の人格は、本当に面の状態で周りのことが分かるのだと思うと、とても不思議だった。

「初めて私の前に出てきた日のこと、教えて」

普段より質問が多い私を、黒目がじろりと見る。敢えて無神経なそぶりでそれを受け流して、黙って答えを待った。

「……長いこと眠っていたが、お前の独り言で目が覚めた」

鬼二十はタンスに寄り掛かるのを止め、胡座で座り直した。頭を前に倒した際、角にかかった長い後ろ髪を鬱陶しそうに左手ですくう。

人の気配で目が覚めることは、よくあったと言う。十年以上、祖父が荷物を放り込むだけだった蔵に、ある日私がやってきて何やら長居し始めた。あの時は蔵の奥で、そのまま私が何をするのか様子を見ていたらしい。

「そのうえお前がこのこ私に近付いてきたので、少々生気を頂いた」

「……え」

さらりと、悪びれもせずは何やら不穏な事を言われた。

厳密には知らないけれど、生气という生きる力みたいなイメージがある。それを勝手に取られたと聞いて、いい気はしない。

そんな心境を隠さず鬼二十を見るが、仏頂面のままだ。詫びる気持ちは無いと見える。

「お前が面の内側に触れるからだ」

……さらに、悪いのは無用心な私だと言いたいらしい。よくここまで真つ直ぐな目で自分中心に語れるな、と逆に感心しそうだ。

鬼面の赤いつややかな裏面を思い出して、あの日の立ちくらみに合点がいく。

あの時点で怪異は始まっていたということだ。そして間の悪いことに、その時竹箒も命を持った。

私も妖怪の存在に慣れたのか、竹箒騒動の内訳も聞いてみればた
いしたことはない。話の内容から、鬼二十の本体を身につけると生
気を取られることだって知った。

「もう同じ失敗はしないからいいの」

私はふいと拗ねるようなポーズをとってから、その顔を笑みに変
えようとしていた。

鬼二十が真面目な顔をしたまま、胡座を崩して膝立ちになる。

「……何」

尋ねる声も思うより小さくなって、必要以上に近寄ってくる鬼二
十への制止にはならなかった。

私の手首を、鬼二十の大きな手が掴む。何事かと目で訴えても、
鬼二十は何の動揺も見せずに、こちらを見つめ返した。

それには私の方が、いたたまれなくなってしまふ。

手首を握る手が熱をもってきて、頭上から降る鬼二十の視線も力
強い。そんなに意識はしていなかったが、平均身長程度の私に比べ
たら、鬼二十の方が当たり前に体格は立派だ。

射竦められて身動きできない私の腕を人形みたいに引っ張りあげ
て、……そのままべろりと舐めあげられた。

「ひっ！」

私は腕を咄嗟に引っ込めようとしたが、一度揺らいただけで、腕
はまた鬼二十の口元に寄せられる。

つつ、と肘から舌を滑らされると背筋がぞくぞくした。

胸が騒がしくて、頭の整理が追いつかない。手首を捉えられたまま、私は腕を舐めた男をただ凝視し続けた。

睫毛まで赤で縁取られた瞳がこちらを向いて、その顔は眉根を寄せる。

「……なんだお前、一瞬酷い味がするぞ。何か塗っているのか」

思考がショートしていた私は、耳に入った質問を素直に考える。

「え……、ひ、日焼け止め」

「薬か。どつりで」

鬼二十は私の手首を解放して、自分の唇の端を舐めた。手首にじわりと血が通って、本来の思考が戻ってくる。

「どつりでっていうか、なんで舐めたの……」

心臓がどくどくと煩い。搾り出すように問いかけた私を一瞥して、鬼二十はのんびりと畳に腰を下ろす。

「ん。生娘の肌の表面に、食料となる美味い気が流れているのだ」

どこか機嫌が良さそうに説明されたが、私は逆に気分が重い。体まで怠くて、どこまでも沈んでいけそうな心地だった。

聞いたことはあるけれど、意味はきちんと知らない言葉があった。それを小さく聞き返す。

「きむすめ？」

「処女とも言うな。お前は相手がいなさそうだ」

日常会話で頻出はしない、しかし意味の分かる言葉に言い換えられて、前後の会話も理解する。

……確かに私はそうだったけれど、当然面と向かって異性に「処女だろ」なんて言われたことはない。

恥ずかしさと馬鹿にされたような気持ちが一気に押し寄せて、私は鬼二十を怒鳴りつけた。

「へっへんたい、変態！」

「そう騒ぐな、ただの食事だ」

私は何一つ悪くないはずなのに、鬼二十は煩そうに顔をしかめる。そう、鬼二十は大きな音が好きではない。だったらもっと大きな声を出してやろうという気にすらなってくる。

「今まで普通の食べ物食べてたじゃない！」

「あんな効率の悪い物では身がもたん」

納得いかないことばかりで、思いつく端から次々鬼二十を責め立てたが、どれも効果がなかった。私の何故どうしての文句は、少しの反省も引き出せない。

散々まくし立てたら遂に言うことが無くなって、ただ私の息が早くなっただけに終わる。

私の視線に何も感じないのか、鬼二十は口をにやりと歪めて、飄々とした様子で言い放つ。

「元の味は悪くない。お前で正解だった」

平手を食らわせようと右手を振るっても、すつと後ろに退いて避けられてしまった。

空振りした手を下ろさないまま睨みつける私を見て、また鬼二十が笑う。言い表せない気持ちに胸を焼いた。

机や壁に手を借りながら、私はなんとか立ち上がって、足早に自室を去った。

廊下を過ぎて階段に差し掛かる頃には、視界が涙で滲んでわけがわからない。それでも腕でぐしぐしと拭って、少しずつ階段も下りていく。

私の中には、どうしようもないほど陰鬱な気持ちが渦を巻いていた。

鬼二十をもつと徹底的に嫌うべきだった。初めから、私は餌として狙われていたのだから。

私と、面（２）

流されかけていた私も馬鹿だったのだ。鬼二十の得体が知れないのは最初から変わらないのに、勝手に良いように解釈して、気を緩めていた。

鬼二十は殺す気がないと言っただけで、危害を加えないなんて誓っていない。むしろ目的を尋ねたら、怪しく笑ったじゃないか。

これまでの数日間とはもう事情が違う。だって、あんな事をされると分かっているのに部屋へ住ませたら、それは黙認になる。

抵抗してもびくともしなかった腕の感覚と、肌を這う他人の舌の感触を、体が定期的に思い出す。

鬼二十は「食事」だと言った。普通の食事では身がもたないともつまりあれば、鬼二十がいる限り今後も起こることなのだ。

舐められることそのものは、怖いことでも痛くもない。

ただあの瞬間、私たちは捕食者と餌の関係だった。私の意思や抵抗なんか無視をして、鬼二十は生気を奪った。

妖怪と同居するだけでも普通じゃないのに、肌を舐められて、それが食事で私は餌？ そんな生活は、間違いなく異常だ。

洗面所と風呂場は二十年ほど前に改装されているそうなので、新しい作りをしている。

私は母達に心配をかけないよう、足音を殺して洗面所に向かい、泣いた目を冷やした。ひたすらに黙して、白いクッションフロアにしゃがみ込む。

この妙な疲労感やナーバスな心理状態は、生気が取られたことに

関係しているんだろうか。それとも……鬼二十に対しての微かな期待が、裏切られたことが原因か。

期待なんて、私が勝手にしたことだ。鬼二十から頼まれた覚えはない。

数えてみると、初めて出会ってからたったの一週間だ。その程度の付き合いでは、人間同士でもたいした信頼は生まれまいだろう。

……でも、つい数時間前まで、鬼二十は本当に無害だったのだ。そこにいるだけ、話しかけたら応えるだけ。

友達もいないこの田舎で、他に誰が私の声を聞いてくれただろう。十七歳はほとんど大人で、母がここに越した理由も考えれば、もう人の手を煩わせてはいけないと思い始めた。そうして上手く誰かの傍にいけない私の元に、妖怪は頼まれなくても居続ける。

鬼二十の居座りという立場や偉そうな態度は、私の臆病な気遣いを起こさなかった。信頼に及ばないはずのたった一週間で、私は心に妖怪を住ませてしまったのだ。

疲れた頭で、この先のことを考える。

以前出ていけと言ったら、本体を壊せと言われた。つまり説得される気はない。

では壊せるかというと、こんな事になった今でもそこには踏み切れそうになかった。それならいっそ、私が遠くに逃げてしまいたいとすら思える。

このまま答えが出ないと、事態は何も変わらないだろう。こんなのは嫌だ、と思いながらそこに身を置くのは、きつと苦しい。私は祖母の家で暮らす日々を、嫌なものにはしたくなかった。

パチンと弾けるように、思考の中の「祖母」という存在から連想がなされた。

私はとある一つの方法を忘れていた。それを今、思い出したのだ。

供養。あの竹箒をそうしたように、山のお寺に行って面を供養してもらう方法だ。

存在を消すという点では壊すのと変わらないけれど、例えるなら刺殺と安楽死くらいの差はある。

何より、私の手から離れた場所で事態が解決するだろう。感じなくていいはずの罪悪感を、少しは和らげることが出来る。

どうにかする為の手立てを、思いついてしまった。

やけに胸が不安げに痛むけれど、これを抑えて今行動を起こさなければ、手遅れになってしまう。そう思った。

祖母が良いと言ってくれば、面を供養してもらえる。元通りの毎日が送れるのだ。

祖母は、自室でアイロンをかけていた。入口から声をかけたら座るよう促され、座布団を一枚借りる。

私は「もし今鬼二十がこれを阻止しにきたら」なんて想像をしてふすまの方を意識していた。でも同時に、そんな事は起こらないという確信めいた感覚もある。

上手く言葉に出来ないけれど、私が本気で追い払おうとしていなかったことは当人も知っているのだと思う。

心の底から迷惑であれば、供養だってすぐ思いついたはずだ。壊すことへの躊躇いも同様のことが言える。

蔵に行く時、鬼二十は私に面を運ばせる。自分の命と同等のものを、私に何度も預けていた。思えばあれは、わざと試されていたのかもしれない。

一度や二度なら、気付かないでいたとも言いつける。回数を重ねる度に、私が鬼二十を排除しない選択肢を選んでいると、証明してしまう形になった。

そんなに嫌いではないこと。それ自体が否定すべきだからと拒否するポーズをとっただけで、行動には表れない。その甘さにまんまと付け込まれてしまった。

「……わたし、蔵の奥を整理してるんだけどね。棚にある古い物について、おばあちゃんに聞きたい事があるの」

なんだか嘘をついているような気になったが、よく考えれば嘘でもない。正面に座ったことで、変に緊張してしまう。

祖母は手元に視線をやったまま微笑んで、うんうんと相槌を打った。

「あの辺り、私が子供の時からある物ばかりよ。整理できるなら、した方が良いわよね」

祖母の前向きな発言に少し安心しながら、私は続きを話す。

「奥の棚に、お面があっただけだね」

「鬼のお面？」

シュツ、とアイロンのスチームが噴き出して、私は一瞬肩を揺らした。蔵の奥では、他の面は見つかっていない。祖母が鬼二十の面をすぐに言い当て、私の目を一度見るものだから、無意識に身構える。

「そうねえ」

祖母が持つゆっくりとした間も、今は私の心臓を苛んだ。

何十年も蔵の奥に仕舞われていた面の存在をしつかり記憶している祖母。わざわざ思案する様子も、面がどうでもいい物であれば見られないだろうと分かる。

「あれはおばあちゃんにとっても、少し特別な。仕舞っておいてくれるかしら」

するとシャツのボタンを避けてアイロンをかけながら、祖母は穏やかに言った。

なぜ、とは訊かなかった。祖母がそう言うなら、私にとってこの話はそこでおしまいなのだ。

胸の痛みは治まったものの、今度は血の気が引いている気がする。間接的にでも鬼二十を消す重みは背負わなくて済むが、やっと思いついた方法が潰えて、また先の見通しがきかなくなった。

そっか、わかった、となんとか返して立ち上がる。そのまま踵を返すと、後ろから声が掛けられた。

「なにか、あったの？」

何かあったと思うの？ 面のことを、何か知っているの？

祖母にそれを尋ねそうになったけれど、今の私の気持ちのありようは普通じゃない。マイナスだ。もっと落ち着いている時に話をしないと、余計な事を言ってしまうそうだった。

「何もないよ」

笑ってそう答え、意識的にゆっくりと祖母の部屋を後にした。

今は、自分の部屋には戻りたくない。鬼二十に会いたくないというよりは、事が起きたあの空間でまた二人きりになるのを避けたかった。状況を再現するような事をしたら、私は何も言えなくなる気がする。

祖母が鬼の面を特別と言った以上、供養どころか捨てる、壊す、全ての物理的な解決策は難しくなった。

もう、私は直接鬼二十と対峙する他ない。

家族がいる場所以外では、どこでだって鬼二十が現れる可能性がある。私はその中でも可能性の高い、蔵へ向かっていた。

観音開きの戸が、いつもより重く音を立てた。不思議なもので、クーラーが無い割には外の暑さをあまり籠らせていない。

私が多少荷物を移動させ、整列させた蔵の中ほどまで歩を進める。扉は開いたままにしてあるが、やはり中は薄暗かった。

「遅かったな」

そう待たなくとも、鬼二十は蔵に現れた。声のした方向に視線を

さ迷わせると、意外な所で生きた両目を見つける。

どこを足場に行っているのか、高い所にあるダンボールに頼杖をついて、鬼二十はうつすらと笑っていた。

「部屋にいない時は蔵だと思っていたが、そうでもないらしい」

軽口を叩くような調子の声といい、私から生気を食べた鬼二十は随分元気そうだ。

黙って鬼二十の方を見据える私を映して、口元から笑みが消える。姿を一瞬見失ったと思ったら、歩いてきたかのような自然さで鬼二十は数メートル前方に立つ。

髪や和服を揺らめかせて、大きな歩幅でゆっくりとこちらへ来る。

「私が嫌か」

声が静かに蔵へ響く。警戒を身体からにじませる私を見て、鬼二十はそれ以上近寄るのをやめた。

せめて自分の気持ちを言わなくてはいけない。緊張して強張る喉を震わせて、声にする。

「あれは、嫌だった」

行動を否定されても、鬼二十は怒ったりはしなかった。無表情で、ただ私を見ている。

「……今日は何もしない。さっきの分で、当面はもつ」

そう言うってから、先程中断した歩みをまた数歩進め、いよいよ手が届く距離までやってきた。私が身をかたくしても、止まりはしない。

目の前の鬼二十から手が伸ばされた気がして、思わず俯く。すると手は触れるか触れないかの弱い加減で、私の髪を一房撫でた。これは餌を確保するためのもので、私個人を認識しての行動ではない。そう思う自分と、単純に受け取ってしまう自分の両方ともが真実だ。

「もうしないとは約束できないが、綾。お前の部屋に住むのを止めよう。それで」

紡がれる、恐らく彼が考えるなりの提案を最後まで聞こうとはしなかった。それは私の望むものとは遠いのが、分かるからだ。

「押さえつけたりしないって約束して。それなら、良いから。食事も……部屋にいるのも」

私はまた一つの選択を、今度ははっきりとした。

多分人としては真つ当じやない選択だ。人外の者に交換条件を突き付けて、受け入れようというのだから。

顔をあげると、意図を探ろうとする視線が山ほど降り注いでいる気がした。数秒後になってから、視線も目の前の鬼二十に合わせる。力強い黒目は、何かを捉えたようだった。

「……お前は年頃の娘だが、子供なのだな」

鬼二十が神妙な顔をして呟いた言葉は、内容の割に棘を感じなかった。むしろじわりと胸が痛んで、生傷に染み入るようだった。

私と、面（2）（後書き）

一応ここが一章の終わりです。

人の気を食らう妖怪として多少の誘惑はしていたのに、思ったより効果なし。

娘を自分に惚れさせて、進んで食事提供するように仕向けたはずが、寂しさを理由に頼られてしまうのでした。

友達（１）

夏はまだ終わらない。八月半ばの古い家屋、二階の一室は何年かぶりに感じる茹だるばかりの夏だった。

その記憶は何年前のどのものだっただろう。祖母が出してくれた扇風機の風では足りなくて、私は下敷きも使って風をおこす。

そうだ中学の旧校舎、夏休みの部室だ。高校に上がってから部活にも入らなくて、蒸し暑い場所でわざわざ過ごすなんて事からは縁遠くなっていた。

こめかみから汗が一筋流れて、顔をしかめる。畳で仰向けになっていた私は、横向きに寝返りをうった。

その方向には鬼二十が座っていて、昼間からだける私を黙って見下ろしている。

鬼二十の服はゆったりしているものの、上下とも五分丈以上で布地は胴着みたいに厚い。そして服の事は置いて、頭が暖色系で量の多い長髪だ。

見ているこちらが暑い。私は更に眉を寄せて鬼二十を眺めたが、その表情だけは涼しげだった。汗もかいていないように見える。

「……暑くないの」

「全く」

ずるいなんて一言で済ませたくないくらい、その余裕が羨ましい。鬼二十はむしろ、私がぐったりしているのを不思議がっているようだった。今日の気温は三十度後半で、湿度も高い。規格外なのは鬼二十の方だ。

はあと一つため息をついて、私は近くにある携帯電話を手繰り寄せた。二つ折りのそれは、閉じたままでも着信やメール受信をランプで知らせる。何もないことを分かっているながら、私は一度開いて待受画面を眺めた。

何もない。ニュースのテロップが、どうでもいい宣伝を流しているくらいだ。今度は小さく、ひそかにため息をつく。

「お前はその板で、何をしている」

珍しく、鬼二十から質問をされた。指差す先は当然、私の手にある携帯だ。

携帯どころか、こんなに小型の機械やプラスチックが昔に存在しなかったのは分かる。でも板って。かまぼこ板か。

普段散々私を馬鹿にしている鬼二十が、真面目な顔で変なことを言うのが面白い。ほんの少し気分が軽くなって、私は適当なメールを一つ見せながら説明をした。

「メール……、手紙のやりとり。一瞬でこう、遠くの人と文章が交換できるの」

鬼二十は目を細めて、黙っている。理解したのかは私にはわからない。相手の立場に立って説明をしようにも、百年以上前の人に合わせるなんてハードルが高すぎた。

「……この家に引っ越してくる前の友達から、メールの返事がこない」

ぼつりと呟いた言葉は、今日ずっと私が気にしていたことだ。も

う引越してから二月になるが、私が頻繁にメールを交換しているのは、一番仲が良かったその子だけだった。

友達が少ないという訳ではなかったと思う。ほとんどの友人とは、SNSサイトで繋がっていればメールするほど話すことは無いのだ。日記や呟きで近況を知れるし、コメントを残せばそれで事足りる。学校に関する話題を共有しなくなっても、お互いにたわい無いメールを送りあう関係。恐らく親友。

反対側に寝返りをうつて、鬼二十に背を向けた。そのままじっとしていると、声を掛けられる。

「何日こない」

「……二日」

現代人ではない鬼二十にこの感覚が理解されないのは予想できた。振り返ると案の定、私の答えに呆れた顔をしていた。

「文ならもつとかかるのが普通だ」

「だろうね。でもメールは一瞬で着くの」

内容は緊急の用事ではなく、ただの雑談だ。急かすつもりもないし、絶対に返信をよこせとも思っていない。

些細なことが不安を煽る。

メールは文字しか伝えられないから、誤解を与えやすい。それを気軽だと言う人もいるが、反応を見ながら表情を交えられる分、顔を見て話す方がずっと楽だ。

でも私にはもう、簡単に会うことは出来ないのだ。もし毎回のメ

ールで少しずつ誤解やストレスを与えていたなら、それを解消することなく時間が経ってしまう。

彼女からその日のうちに返信がこないのは初めてだった。今のところ私に思い当たる節はないけれど、微かな繋がりが切れてしまわないか、不安を感じていた。

部屋の外から、階段をのぼる音がした。足音がこちらへ向かってくるので、私は身を起こす。

「綾、お使い頼んでもいい？」

母は普段、用件を伝えながらふすまを開け放つ。

心配しなくても、この時鬼二十は既に姿を消している。私も祖母と母に鬼二十のことを隠そうとしていたが、鬼二十だって無闇に姿を見せるメリットは無いのだ。

こういった場面でも平然としていられるくらい、私は鬼二十のいる日々に慣れてきていた。

家から一番近いのは、個人経営の商店だ。店は小さいが、生鮮食品以外は大体の物が一種は置いてある。

店主は明るい人で、おばさんと呼ぶように何度か言われた。実質私の祖母と同じくらいの歳みただけけれど、はきはきとした話し方は正しく「お店のおばさん」だ。

店に入る時会釈すると、おばさんは微笑んでハイいらっしませ、とお辞儀した。店内は古いながらに、クーラーがごうごう音をたてて涼しい。

私は外を歩いて熱くなつた体を冷まししながら、頼まれた消耗品の列へ入って行く。

「あら、ヨウ君。また麦茶のパック？　それだけ買いにきたの？」

楽しげなおばさんの声が響いて、私は先客がいた事に気が付いた。会計台に、水出しのパックが大量に入つた家庭用麦茶がどんと放られる。

……あの麦茶つて、一年に一袋あれば充分な量だと思つていた。またと言うからには、少なくともこの夏二度目以降なんだろう。

ヨウ君と呼ばれる人の姿は見えないけれど、声を聞く限りは子供でも大人でもない、学生らしい雰囲気だった。

「俺ががぶ飲みするせいだつてさ。自分だつて、一日二リットルは飲むくせに」

まあ暑いのにご苦労様、とおばさんが笑う。

私はちょうど品物をカゴに入れ終えて、会計台に向かった。「ヨウ君」はＴシャツにジャージ姿で、やはり高校生くらいだ。

彼の後ろにカゴを持って並ぶと、横顔が見えた。気のせいではない、彼とはこの商店で何度か会ったことがある。勿論、話したことはない。

会計が私の番になった時、彼は初めて私が後ろにいたことに気が付いたらしい。少し驚いた素振りで場所を明け渡してくれたが、彼は何故だか帰らずに、その場で立っていた。

そうされると私も気になって、会計しながらちらちらと「ヨウ君」の方を見る。日焼けしてすっと伸びる手足が、鹿を連想させた。す

ごく運動が出来そうだし、モテそうな人だ。

私より頭一つ高い背から、ずっと視線が注がれている。知り合いだったか、何か用があるのか。そういう可能性について考え始めるくらい、じろじろと眺められていた。

会計を終えると、おばさんが私達を交互に見てニコニコしている。親戚に従兄弟やハトコの嫁候補扱いされているような、面倒なお節介を予感させる笑顔だった。

「歳、いくつ？」

おばさんが何かを言う前に隣の「ヨウ君」から話し掛けられたことに驚いて、彼を見上げる。特に深くは考えず、質問にも答えた。

「……高二。十七歳」

私の答えに、彼は軽く目を見開いた。おばさんが、あらあらと嬉しそうに笑う。

彼の事がどうか言うのではなく、初めて話す人とこんな風に見られるのはなんだか嫌で、私は急いでおばさんの手から袋を受け取る。

一応「ヨウ君」にも会釈して立ち去ろうとしたら、彼の方を向いた瞬間に、また話しかけられた。

「お前、どこ中？」

……目の前の人が口にした台詞に、私はかなりしらけた気持ちになった。言うに事欠いて「お前どこ中」って、田舎のヤンキーじゃないんだから。

自分の頭の中で入れたツツコミを反芻して、気が付く。

ヤンキーかどうかは知らないけど、田舎なのは事実だった。

ここは母の故郷で、私が住んでいた街までは新幹線と電車で一時間半かかる。もう私の生活圏は、生まれ育った地元ではないのだ。

「ヨウ君」を横目でじろりと見る。近頃は、初めて会う人にお前と言われているばかりだ。

「ずっと遠く。あなたの知らない中学！」

言い捨てるようにして、私はその場を後にした。

友達（2）（前書き）

前半の綾が2章で最低のテンションです。

友達（2）

こちらでは車移動が基本だから、ショッピングモールなどで見かける女の子は、近場の子とは限らない。隣の市くらい車では簡単に行ける。徒歩圏内の小さな道ですれ違うのが、本当に近所の子だ。そうになるとやはり、ヨウ君とやはらは近所に住んでいるのだろう。人となりは知らないけれど、一瞬疑ったヤンキーなどではなさそう。うだ。もしそうなら、あの後すんなり帰れるはずがない。

今日は、ちょっと拗ねた気持ちで帰宅したあの日の翌々日だ。私はまだ、友達からのメールを待っていた。

四日というところ、すっかり忘れていた程度のことではない。受信フォルダに私からのメールは残っているだろう。一度は思い出したはずだ。

物凄く落ち込んでいたとか、体調が悪かったとか、忙しくてどうしようもない時に送ってしまったんだろうか。だとしたらごめんと、軽く謝るメールを送ってみるか――

それもしつこい気がするし、返事を強要するようで嫌だった。

私が学校に通わなかった一ヶ月間に、特に感じたことがある。環境が変わるということは違う時間を生きているようなものなのだ。

今の私にはあの子しかないように思えても、彼女には今まで通りの付き合いや学校生活がある。私と違う時期に行事やテストがあり、必要な物も違う。

何日メールが来ない、なんてうじうじしている段階で、私はあの子にしがみつきすぎだ。

大人にならなきゃと気ばかりが焦って、行動が全然伴わない。私は突然知らない道に入って、後ろを見ながら歩いているのに等しかった。そのうえ、鬼二十の手を取っている。

色々な理由を想像したり、気にしては駄目だと思いを追い出したりで忙しい。こんな時こそ働いて気分転換しようと思っても、蔵への荷物運びはもう終わってしまっていた。

夏休みも終わりが近い。宿題がなくても、九月を控えた学生は落ち着かないものだった。

私の場合は行かなかった分を補う必要もあるし、高校には珍しい編入生だ。それなりに緊張もする。

この話も、出来るならあの子に聞いてもらいたいのに。

……考えが自然とそこに行き着いてしまう自分に、眉をひそめた。

英語や数学は離れると特にわからなくなるからと、私は九月を前にテキストを開いた。それが全然進まない。

呼べば姿を見せるだろう鬼二十は、今朝会ったきりずっと静かだ。私が机に向かったまま話しかけないので、いる意味がないと判断したのかもしれない。

くるりと回したペンが、指に当たってノートに落ちた。

「あなたの知らない中学」

小さく、一昨日自分が言った言葉を口に出す。わざわざ棘を付け

足したような、嫌味な言い回しだ。

距離感の無い彼の態度がちょっと嫌だったのは確かだけど、私の返事も相当感じが悪い。きっと彼の方も、私を嫌な女だと思っただろう。

幸いと言っているのか、彼とは近所だという以外接点はない。まさしく言い逃げになるけれど、会わないように気をつけよう。今のところあの商店でしか遭遇したことが無いんだから、そんなことは簡単だ。

不思議なもので、こんな時に限って現実はいレギュラーを発生させる。

母が申し訳なさそうに部屋へ来て「またトイレの電球切れちゃった」と、私はお使いを言い渡された。

それだけで済めばこうは言わない。買い物を済ませて店を出るとちょうど「ヨウ君」が角を曲がってきたのだ。

私はぎよっとして、踏み出した足がぎこちなく一瞬止まる。彼の方もすぐ私だと気が付いたようだった。

揉める前に逃げてしまおうと、私は顔を伏せ気味に横をすり抜けようとした。

狭い道だから、彼が一步横に動くだけで簡易の通せん坊状態になる。とりあえずは立ち止まるしかなかった。

「一昨日は、なんか怒らせたみたいでごめん」

……想像していないことを言われると、人間は咄嗟には意味を理解出来なくなる。私の口からは、えっと間抜けな声が出た。

この人はなぜ謝っているんだろうと、思わず顔を凝視してしまう。

すつきりした輪郭の中の表情は、わずかな敵意すらなかった。

なんか怒らせたみたいで。その言葉からは、理由はよくわかっていないんじゃないかと窺える。なのに彼は、本心から申し訳なさそうな顔をしているのだ。

どれだけ善良な性格をしていれば、よく知らない人間にこんな態度を取れるんだろう。私はリアクションが一周して、結局呆然と彼の顔をただ見ていた。

「この辺り、見たまま田舎だからさ。近い歳の子供は大体顔合わせで育つんだよ。同い年なのに知らない顔だったから、つい」

彼は言い訳のように一昨日した質問の内訳を話し、目を細めて苦笑する。

今日もＴシャツにジャージ姿の彼は、どうやら走り込みでもしていたところのようだった。口を開くほど、真面目で正直なスポーツマンのイメージが固定されていく。

「引越してきたって、おばさんに聞いた。……名前、聞いていい？」

大人しく話を聞いていた私も、話を振られてはたと気がつく。

彼が悪い人でないのはよくわかった。なのに、この妙なもやもや感が言葉を出すのを許してくれない。

なんでこう、とんとん拍子に話が進んでしまうんだろう。いつも電車の同じ車両に乗る、その程度の仲でしかなかったはずだ。少しタイミングが合っただけで、名前を訊かれたり、自分の挑発的な言葉をフォローされるのに戸惑う。

上手くいったほしい事は停滞するのに、見知らぬ彼とはレールを

敷かれたみたいに強引に引き合わされ、背中を押されるようだ。

お人よらしい彼も、私が名前すらすぐには答えないことに少し訝しがる。

その反応こそ正解でいいと思うのだ。私は全く友好的にしていなのに、相手が都合よく善人で話がきれいにまとまるなんて、それこそ出来すぎだ。

「……私、あなた知らないし」

目を逸らすと、彼は少し笑いながらも「は？」と私の言いようを非難する。

「そりゃ、そうだろ。だから話しかけてるんだって」

……もつともな主張です。

私は「ヨウ君」と上手くいかなくてもいいんだ！ と天に訴えるように、捻くれた態度ばかり取っている。自覚はあっても、正論を言われると思わず口が反発した。

「人に訊く前に、自分から言っつてよく言わない？」

我ながら、漫画に出てきそうなくらいの生意気な台詞だ。言った直後から「さすがにこれは無い」と後悔の嵐が吹き荒ぶ。彼も、これにはムツとした表情になった。

「……俺は、あしかわ芦川洋介」

なのに、なぜ名乗ってくれてしまうんだ。
彼が いい人であるほど、私の酷い態度が照らされる。真っ直ぐな

眼差しが私に穴を空ける。

全てのことが思惑の反対をゆくようで、私はそこからも逃げ出してしまうのだ。

「お前は近頃、買い物の帰りが遅いな」

部屋に戻ると、鬼二十が咎めるような目つきと口ぶりで一言刺した。早く帰ると言ってもいないのに、つられて謝ってしまった。

お使い程度で帰宅が遅いと言われては、九月からの登校が不安だ。普通の高校生活は朝早く出て、帰りは夕方になる。半日は鬼二十をほったらかしにするだろう。

ななめ掛けの鞆をポールにかけ、ふうと一息つく。すると、背後からベッドを下りる音がした。

「……綾」

鬼二十の口から私の名前が出て、心臓がぎゅっと縮んだ心地になる。

母がよく私を大声で呼ぶからか、いつの間にか名を呼ばれるようになった。しかしこの呼びかけには、ときめいたりするような意味合いは無い。

壁にかけたカレンダーをちらりと見て、記憶を辿る。

「ああ、うん。もう四日だ」

初めて舐められた時の「食事」は、やはり取り過ぎにあたる量だ

つたらしい。それは鬼二十の方も体力がかなり限界に近かったからで、穴埋めをした私も結構嫌な気分を味わった。

お互い余裕を持ったために、一週間未満のうちに軽く済ませる約束をしたのだ。

日焼け止めがついたまま、もしくは汗をかいた体を舐めさせるのは当然問題だ。かといって、お風呂上がりには食事をさせてそのまま寝るというのも頂けない。

中間を取って、私はお風呂に入る前にウェットティッシュでその部分をよく拭き、鬼二十へ差し出す。このウェットティッシュも、変な薬品が入っていないものをわざわざ買ってきた。

そのケースを手にして、鬼二十のすぐ前に腰をおろす。小首を傾げる、というと形容が可愛すぎる気もするが、鬼二十はそうして私の目をじっと見た。

「今日も、手か」

それは単なる確認だ。しかし私は、前回初の試みとその光景を思い出して、赤面しそうになる。

西洋の王子様が手の甲にキス、なんてシチュエーションですら、慣れない女の子には恥ずかしいものだろう。私だって免疫がある訳じゃないのに、四日前の私は深く考えずに「手」を指定した。

「腕」では広範囲すぎるし、初回のような異様な雰囲気は避けない。袖を捲る必要すらない、常に露出している「手」なら何の問題も無いだろう。そう考えたのだ。

手、つまり手首から先だけだと言われて、鬼二十は難しい顔をした。私との約束は、力で押さえつけないこと。それを意識してか、

私が差し出した両手をそつと下からすくって、顔を近づける。

ちろりと赤い舌がのぞいて、軽く指の第二関節から拳の凹凸を辿った。それだけで手は反射的に力が入って、小さく震える。

私は即座に「手」を指定したことを後悔し始めた。鬼二十は伏し目がちのまま、私の顔を見ることはしなかったけれど、私には状況の全体が見えてしまう。

これではお互い両手を取り合っているみたいだ。しかも鬼二十は真剣な表情で、私の手に舌を伸ばす。それもキスのついでの戯れ程度ではなく、表面にあるという気を舐めとるのが目的なのだ。

舌ばかりを口から突き出すのは困難だ。だから舐めようと顔を傾ける鬼二十の唇が、舌と一緒に指先をくすぐっていく。

……手の方がよほど、視覚的に不健全だった。神経が多い分、感触も腕よりずっとこそばゆい。

はたして赤面とは我慢できるものなのかといつも思うが、今となつては努めるしかない。

思い出した四日前の映像を必死で吹き飛ばすように、私は大きな声で「今日からはずっと腕！」と鬼二十に伝えた。

友達（3）

鬼二十に生気を食べさせると、適度に疲れて寝入りが早くなる。その疲れを今までの経験と比較するなら「そういえば、昼は体育で頑張ったな」程度だった。

与えている最中に自覚はない。後で意識すると少し体が重くて、気だるい気分になっているのだ。

疲労感はあるが、私はこれをたいした被害だとは感じていなかった。夜更かしの気にならないという点は、今後困る日があるかもしれないけれど。

予報では今日、雨が降ったら冷え込んで一足早い秋になると言っていた。ところがその雨が降らない。だから涼しくもならなくて、じっとりとした暑さが和室に充滿している。

昼には祖母が部屋を訪ねてきて、週末にエアコンを買いましょうと言った。夏はもう終わるよと返せば、祖母は身振りをつけて「冬は寒いだよ」と脅かしてみせる。

改めて窓を見ると、確かにその厚さは頼りない感じがした。風が強い日は枠がカタカタと鳴るのだが、今日はそれも無く、部屋の空気が留まり続ける。

暑い、と一人呟いたが反応はかえらない。

始業日寸前まで手をつけなかった勉強は、なんとか勘を取り戻しつつあった。

今日の私は割と無心でやるべきことをこなしている。しかしこの不快指数の高い空気が、何度も集中力を乱した。

もう過去形にしてしまつて良いだろう。友達からのメールの返事は、結局来なかった。

何日来なかったのか、一日ずつ思い出しながら遡るのも一苦労する。恐らく、六日くらいだ。彼女の携帯の受信フォルダ内でも、かなり下方へ流れてしまつたに違いない。

テレビがつまらない、友達と話さない、部屋には鬼二十がいる。これだけ条件が揃えば、部屋で自主的に予習復習をするなどという、優等生らしい毎日が実現した。

完全に吹っ切れたと言えは嘘になる。でも、時間と慣れは確実に不安を薄めていた。

携帯を開いて彼女の名前を見つけないことに慣れ、メールを待つことにも慣れた。そこで負の感情が湧く前に「それがいつも通りだ」と感覚が話題を終わらせる。

この段階になつて、顔を合わせない事がプラスに働いた。メールが途絶えても、会わなければ気まずい思いをすることは無いのだ。会えないから不安になつて、会えないからそれ以上えぐられることがない。数日前より穏やかでいることが皮肉に思えて、私は意味もなく前髪を引っ張つた。

……気にすることが億劫になつたというのも、否定は出来ない。これが離れるという事だ。距離に心も引きずられる。高校卒業を機に迎えただろう経験を、私はたまたま少し早く体験しただけ。移り変わらないものは無い。それは友達だけでなく、私の方にも言える。そう考えるようになった。

心なしか、鬼二十の食事でぐったり疲れてよく眠つたら一山越えた気もする。褒める相手を間違えずに言う、睡眠は偉大だ。

そこで鬼二十の事が気になって、部屋をきよろきよと見回す。姿が見えないので、私は定位置の一つである押し入れの前を凝視して、語りかけてみた。

「鬼二十、そこにいる？」

しんと数秒の間が流れる。呼び掛けて応えがなかったことはあまり無い。部屋にいるとは思うのだが、見えないのでこればかりは鬼二十次第だ。

物音を聞き漏らさないように静寂を作ると、もうセミはほとんどいなくなつたのだと分かる。

「お前は、本当に勘が鈍いな」

呆れた声がしたのは反対側、ベッドの方で、振り向いた時には赤茶髪が私の後ろをなびいていくところだった。

鬼二十は私が予測を立てた方向へわざわざ移動して、どかりと座る。「これでいいのか」とでも言いそうな眼差しで、椅子に座る私を見上げた。実際のところ、場所にこだわりがあつた訳では無いんだけど。

呼び出していざ前にすると、勝手とは思うが今日も暑苦しい身なりだと思った。鬼二十が後ろを通過した時ですら、そよ風も起らない。髪はなびいていたのに。

やはり、暑苦しさの最大の要因は放置された長髪だと思う。私は髪を結っているけれど、鬼二十を見ていたら結う前のうなじを蒸す感覚がよみがえった。

私が立ち上がると目の高さが変わり、鬼二十のつむじまでよく見えた。

「……頭、貸して」

机にあったシュシュを一つ掴んで、答えを待たずに後ろへ回り込む。鬼二十は眉間にしわを寄せて私を振り返ったけれど、髪を二、三度手で梳くと諦めて前を向いた。

思ったより引っ掛からないが、鬼二十の髪はどうもぼさぼさと量が多く見える。長髪といっても、先までしっかり伸ばしているわけじゃないからだ。あちこちから毛先がはねて、束ねても滑らかにはならない。

シュシュを片手に纏める位置はあえて高めにして、私は口元で笑む。男のポニーテールという、恥ずかしい髪型にしてやるのだ。

現代の男の子なら途中で察して嫌がりそうなものだけど、鬼二十はさつき諦めたきり邪魔をする気配は無い。ふんわり流れるポニーテールをぽんと叩いて、私はにやにやしながら正面に戻った。

鬼二十がじろりと睨みあげてくる。可愛いシュシュと鬼二十の顔を並べて見るのは一瞬笑えたが、残念なことに美形は髪型を選ばなかった。

顎のラインと耳があらわになると、小さな驚きと妙なときめきに一瞬押し黙る。

ある日クラスメートが髪を切ってきたみたいな、目新しさに対するドキドキ感だとは思う。でも、男子生徒が芸能人のポニーテールを褒め称えていた気持ちがあったような気にもなってしまった。別に鬼二十は可愛くはないけど、急に顔周りがすっきりすると人は色気が出るものらしい。

悪戯のつもりでやったのに、何で馴染んでるんだ。しかも本人はノーマリアクションで、相変わらず目だけが雄弁に「何がしたいのかわからん」と訴える。

私はぎこちなく、当初の理由である「見ていて暑そうだったから」という言葉を言い訳みたいに伝えた。

鬼二十は結われた自分の髪を見ようとしたのか、右と左に一回ずつ首を振った。ポニーテールは揺れて、視界には入っていないさそうだ。

しかし首を前傾しても後ろ髪が邪魔にならないことに気が付くと、無表情ながらに感心していたようだった。そういえば以前、髪を角に引っ掛けて嫌そうにしていた。

鬼二十が取ろうとしないので、その可愛らしいシユシユは今日一日男の髪を束ねることになりそうだ。自分でやっておきながら、私は苦笑いをする。

思えば、頭に触れたのは初めてだった。鬼二十の頭といえば、くすぶるような赤髪だけが特徴ではない。鬼でもないのに額から生える角は、なにより存在感がある。

意識を向けたら、つい手をそこへ伸ばしそうになった。途中で気が付いて急停止をかけたが、何をしようとしたかは指先の向きで一目瞭然だろう。

反射的に、まずいことをしたかなと不安になって角の主の顔色を窺う。畳に座る鬼二十は私を見上げるだけで、何も言わないし表情も普段通りだった。

それを見て、おそろおそろ、止めていた手をまた角の片方へ伸ばす。

制止されることなく、私の右手は鬼二十の角に触れた。根元が額にあるだけに、引っ張ったら痛そうで強くは触れない。想像よりざ

らざらとしていて、見た目とは違う、木のような感触だった。

今の私の気持ちを例えると、初めてペットがお腹を撫でさせてくれた状況に近いものがある。ペットみたいだと言いたいのではなく、鬼二十は拒否するだろうと思っていたのだ。

凄いことを許された気がして、私は内心かなり感動していた。

基本的に鬼二十は私に踏み込む側であって、こちらはどこまで近寄っていいのか分からない。もしそのラインが分かったとして、自分がどれくらい踏み込みたいのかも、私には分からないのだけれど。

三十秒近く触っていたら、鬼二十の目が私の腕と顔を交互に見つめた。やっと私はそれに気付いて、手を少し離して鬼二十を観察する。

ほんのわずか、眉を寄せている。文句は言わないが、よく見れば嫌そうに見えなくも……ない。

分かりづらいから、嫌ならそうと言ってくれて構わないのに、と言葉には出さず考える。

言われなきゃ分からない。

私には正に最近、はつきりと拒絶するでもなく、うじうじとした態度を向けてしまった相手がいる。

関わらないようにした理由だって、今になってみればくだらなくて意味も無い。もっと自然に、正直に接することが出来たら良かった。

たぶん、また会えるはずだ。初めて聞いた時の声ごと、名前ははつきり覚えている。

芦川洋介。彼に謝りたい。

まずは目の前に人に「ごめんと謝ると、鬼二十はふんと鼻を鳴らした。

友達（４）

予報された雨は夜に降って、私は朝早くに寒さで目が覚めた。空は真つ白で明るい。寒暖の差が激しすぎて、秋はどこにいったのかと首を傾げる。

昼過ぎには、母達は祖父を見舞いに行くといい、私は宅配便のために留守番を頼まれた。

暗い木の色をした梁が、古い家の静けさを強めていた。「若い子がいると、家が明るくなるわ」と祖母は言うけれど、自分では雰囲気飲まれている気がしない。

一般的に、古い物には癒しのイメージが強い。しかし家に関して、そこに至るまでを知らなければただ馴染みないだけでしかなかった。

私は今でもたまに、そわそわと落ち着かなくなる。静かな日は特にそうだ。

鬼二十の定位置へ一巡視線を送ったあと、私は上着を羽織って外の空気を吸うことにした。

子供の頃は、玄関先の踏み石周りがジャングルみたいに思えたのを覚えている。背が伸びた今では、特別茂っているわけでもない、普通の庭だとは思わない。そういったことばかりだけれど、外の方が懐かしさは感じられた。

共用のサンダルが石でかかとを音を立てる。表に出たついでにと、私は郵便受けに向かう。スロープを下りながら遠くの景色を見るのは、昔から好きだった。

連日の暑さの後では涼しいけれど、ほうと息を吐いてもさすがに

白くはならない。錆びた金属製の郵便受けもひんやりしていて、背筋に少しの寒気を残した。

「薄着すぎたかな」

ダイレクトメールやチラシの束を抱え、掠れるほど小さく呟く。私の独り言より、裏手の木々が擦れる音の方がよほど元気が良かった。

長居したら風邪をひくかもしれない。そう思いながらも、汗をかく心配がない日の屋外は開放的で、私はもう少しそこに立っていたかった。

そこへ一人分の軽やかな足音がした。その音は長距離走をするような調子で、私はある人物を連想する。

……近所のおじさんという可能性も勿論あるのだけど、そうなら挨拶でもすればいい。鬼二十は私の勘が鈍いと言っけれど、自分では当たりくじに出くわすのは結構多い方だと自負している。私は敷地から覗くようにして、坂道を見下ろした。

当たりだった。

耳にイヤフォンを入れた「ヨウ君」こと芦川洋介が、自身の数歩先へ目線を落としたまま、坂を上っていた。

私はこの坂を駆け上がったことなんて無いけれど、きっと彼ほどしなやかに走ることは出来ないだろう。今日も膝が隠れる程度のジヤージに半袖で、手足の長さがよくわかった。

呼び止めるかどうか迷いながら、私は道に一步踏み出す。動く物を認めた彼の目が、一度私を素通りして戻ってきた。いわゆる二度見た。

彼はスピードを落とし、イヤフォンを外す。私の手前で立ち止まると、微かに荒い息を吐いていた。

「この坂道、結構マニアックな道だと思うんだけど、コースなの？」

尋ねると、彼は少し黙った後首を軽く横に振る。

「俺の家、ここからあと一分くらい、坂のぼった所」

視線を一瞬首から下へ感じると、部屋着だったのを思い出して上着を寄せた。汚い格好ではないけれど、堂々と見せて回るものでもない。

田舎だと言われるこの地域の中でも、半分山に含まれるうちよりも山側に住んでいるという。生活するのに最良の店だけじゃなく、そこへ向かうまでの道のりもほぼ同じだろう。よく会うわけだ。

都心近くの住宅街と違って家の間隔は疎らだし、これは珍しいことだと思う。

彼はうちの表札にちらりと目を向けた。私を横目に見て、皮肉っぽくそれを読み上げる。

「……佐藤さん？」

そのニュアンスに、この数日間私がした数々の言動をあらためて思い出した。私は、彼に名前を教えず逃げたのだ。

「あ、それはおばあちゃんの苗字……。私は峰岸^{みねぎし}、綾」

申し訳なさのあまりしおらしくしていると、彼はその態度の唐突

さに少し驚いた顔をした。私は意を決して、もう一押し彼に歩み寄る。

「少し、話していかない？」

スロープのすぐ下にある石段を指差してみせると、彼の口から微かに「いいけど」とこぼれるのを聞いた。

「あの、私たぶん八つ当たりしてたの。ごめんなさい」

並んで腰掛けて一番に、私はそう言っ頭を下げた。
彼はそれをただ不思議そうに訊き返す。

「……八つ当たり？」

「上手くいかない事で頭がいっぱいで、洋介君に全然関係ないのに、感じ悪くしちゃってたというか」

「ああ」

普通の男の子らしい仕草や話し方に近頃縁遠かった私は、ぶつきらばうな短い返事を必死に分析しようとした。どれくらい怒っているか、今から修復可能かどうか。今は砂利を見つめている彼の表情も、気をつけて観察した。

「ちゃんと話せばよかったって後悔したから、謝りたくて」

きちんと顔を上げて、彼の方を向く。こちらを向いた彼は、目が

合つと気まずそうに視線を泳がせた。

唐突に、彼が短いため息をついて、首の後ろをかく。私はほんの少し身構えて、返事を待った。やがて私をしっかりと見て、口を開く。

「……さっき俺の事、なんて呼んだ？」

そういつた部分はあまり意識せずに口にしがちで、確認されると自信はない。今の私が自然に呼ぼうとして、どうなるかに任せた。

「洋介君」

彼はそれを聞いて、一度黙って頷く。

「君はつけなくていいよ。呼ばれ慣れてないから、むず痒い。謝るとかそういうのも、いい。怒ってないから」

その言い方は簡潔なようでいて、最後の一言が優しげだった。まだ彼の表情を窺いがちだった私に、小さく笑顔まで作ってくれる。私はもそもそと、自分の上着の端を握った。

「じゃあ、私のことも呼び捨てでどうぞ。綾です」

「さっき聞いたよ」

第一印象の悪さを取り返せるくらいに仲良くなれたらいいと、出来るだけ柔らかく笑む。私の二度目の自己紹介を、彼はおかしそうに笑った。

受け入れようとする気持ちでいると、彼の人当たりの良さはとても居心地がよかった。自分の気の持ちようが、どれだけ周りの見え

方を変えるのか思い知る。

最初に「話していかない？」と誘った事もあり、それからお互い簡単に質問をしあった。

彼は一日にどれくらい外を走っているのか、なんて単なるその場の興味に始まり、私がこのままこちらに住むのかどうかなどだ。

当面は祖母の家にいると伝えると、高校はどこに通うのかも尋ねられた。私の答えに、洋介はさりと自分もその高校だと言う。私だけがすごい偶然だと興奮していたら、自転車で通える圏内の高校はせいぜい二つだと笑っていた。

「縁があるっていうか、あの日話さなくてもいつか知り合いになった気がする」

私がつみじみと呟くと、彼はこちらを見て、軽く首を傾げた。

「……そう？」

「人が良すぎるよ。悪い人に騙されないか心配」

私みたいに逆走したって、こうして普通に話せる仲になるのだから、彼に言わせれば大体の人が許容範囲内なんじゃないだろうか。大きなお世話だとは思っけれど、割と本心から心配をしている。

「本当に悪いやつくらいは、分かると思うけど」

彼はそういう事を、他の誰かにも言われたのかもしれない。独り言みたいな声量でそう言っていた。

私の上着のポケット越しに、中の携帯が光る。ストラップを手繰りよせて開くと手紙のマークが表示されていた。

「メール」

思わず呟いて、その流れのまま受信フォルダを開く。

……差出人は、先週私の頭を占めていた友人だった。メールの内容に目を通すと、目元や口元が勝手に嬉しさを滲ませる。

私の様子に、隣の洋介が少し動揺しているようだった。おいてきばりにした事に気付いて、ごめんと軽く詫げる。

「八つ当たりした原因、今解決しました」

喜びが顔からひかないまま報告するのを申し訳なく思うけれど、優しい彼はぎこちなく「ああ、そう、よかったね」と言った。

普通にこちらを見ていた彼の目が、私の背後を映して驚愕で開かれる。あまりにも突然で、えっ、と口に出しかけた。後ろを振り返る前に、洋介が肩を引いて私は抱き留められる。

体勢は崩れたけれど、庇うようにされたことが気になって、首だけでも後ろへ向けようとする。

「近頃遅かったのは、こういう訳か」

聞き覚えのありすぎる、訳を知った風な声でした。

……いや、でも、そんなはずはない。前例がないからそんなはずはないと思うのだけど、付き合いは一ヶ月に満たないので、実は大した根拠にはならない。私がそう思いたいだけでしかない。

身を振つてもう少し後ろを振り返ると、案の定そこにいたのは鬼二十だった。私達が腰掛ける石段を、スロープの上から見下ろしている。

鬼二十の移動可能範囲が未だに謎だ。下から見上げる口元は、うつすら笑っている。

「き、鬼二十、ここ外っていうか、人前なんだけど」

私は抱き寄せられる肩越しに車道の方も気にしながら、拳動不審な反応をした。どうか、母も宅配便も近所の人も現れませんようにと祈るばかりだった。

ここで一番事情を知らない洋介は、困惑しながら私と鬼二十を交互に見る。

「え、何、知り合い……？」

状況が想定のはるか外で、知り合いだと知れてしまったのが良いのか悪いのかも分からない。

洋介が私を庇っていた腕の力を緩めたことで、私もされるがままくつつきすぎていた事を自覚して、多方面からの混乱で顔が赤くなる。

ごまかさなくちゃと、まずは鬼二十の非人間要素を探したら、全身不審すぎて笑うしかなかった。

言い逃れの難しい、額の角。着古した感じのある怪しい和服。髪は染めなくては出ない色だし、それは男なのに一年伸ばしたくらいでは足りない長さだ。

コスプレと言っしかないのだろうか。正直、意味もなくコスプレ

で出歩く身内がいますと言う方が恥ずかしい気がする。

私は、この場での言い訳を諦めた。

「えっと、この人の格好とか、すごい込み入った事情があるの！
また今度、説明する」

とりあえずは何も訊かないでほしいと、ジェスチャーも交えて訴える。洋介はその間も口元で苦笑いを浮かべながら、ちらちらと鬼二十の角や服を見ていた。

あまり見つめるのも止めてほしい。見るほどに、コスプレと言うにはリアル過ぎるのだ。なにしろ本物の妖怪だから。

また今度話そうね、と懸命に笑顔を作って二人の間に立ちほだかり、視線を遮る。私は急いでスロープを脇から登って、鬼二十の背を押した。

屋内に早く押し込むことで頭がいっぱいの私に、鬼二十は協力しようともせず振り返る。

「綾。お前に必要なのは、男よりは兄だと思っていたが」

突然何を言うのかと、つい品性のかけらもなく「はあ!？」と怒鳴りかけた。その衝動はなんとか抑えて、不満をあらわに答える。

「……どっちも必要ってわけじゃないよ」

その答えを鼻で笑って目で馬鹿にして、相変わらずのステキな性格を味わわれる。文句を言おうとした私に取り合わず、鬼二十は洋介の方を振り返った。

「だ、そうだ」

にやにやと話しかけられると、彼は何か口を開きかけてはつが悪
そうにした。私は平謝りして、今度こそ鬼二十を玄関に押し込んだ。

「行ってきます」(1)

ついに、あの幼児体型促進ワンピースを着なければならぬ日がやってきた。……高校指定の制服の事だ。

左脇のファスナーを上げて、ホックを留める。ずっと前から覚悟はしていたのに、姿見を見るとテンションは急降下した。

「ぜったい、変」

鏡にそう言ったところで、微妙に低いウエスト切り換えは変わらないし、はいていい靴下は白のみだ。

前から気に入らなかった、制服と同じ紺色のプラスチックボタン。これは存在意義がほとんど無い。「ウエストに合わせて調節できません」と言わんばかりに両脇のベルトを留めているが、縮めたら変なシワが寄るに決まっている。

あちこちに不満があつて、挙げたらきりがなかった。

「……子供っぽい、似合わない」

かれこれ十分は出発を渋っていた私に、ついには端から見ていた鬼二十も口を挟む。

「そんなことはない。お前に打ってつけな服だぞ」

江戸生まれの妖怪に、このデザインの機敏が分かるとは思えない。二重音声で「そろそろ静かにしろ」とでも聞こえてきそうだった。元より、鬼二十にフォローしてもらいたい訳ではない。口に出して嫌だ嫌だと言うだけでも、多少はすっきりするのだ。

鏡の前であらゆる角度を確認した後、時計を見て腹をくくる。一応インターネットで道は確認したけれど、初めての自転車登校だ。早めに出た方がいいだろう。

具体的な事を考えだした途端に、映る顔が強張っていた。黒板の前で自己紹介するシチュエーションを想像しつつ、微笑んだはずが、頬は引きつる。

これを見て、後ろに映り込む鬼二十が怪訝な表情をしていた。イラツとして即座に振り返ると、既に興味がなさそうにしている。

私はあらためて鬼二十の前まで移動してから、非常に大事な確認をした。

「私、今日から学校に行くから。部屋か蔵にいてね」

鬼二十は視線だけこちらに寄越して、黙って聞いている。ここで返事をしてほしいのだけれど、頷くことすらしない。私は間に焦れて、一度伝えた言葉を細かく言い直した。

「今日は早く戻るけど、明日からは朝に出掛けて、帰るのは夕方。帰りが遅くても、学校まで来たりしないでね」

はきはきと区切って声を張る。私がこうやって強く注意するのは、先日鬼二十が人前に姿を現したせいだ。まだ洋介は鬼二十のことを尋ねてはこないが、もし訊かれたらどうにか説明をしないとならぬ。本人はちょっとした悪戯のつもりかもしれないが、困るのは私だ。恐らく私が話す内容ではなく音量へ、鬼二十は微かに眉根を寄せた。

「その、がっこうという場所を知らん」

声はやる気の無さを固めたような、とてもものんびりしたものだ。
た。

この人が素直にハイやイエエで答えない事を踏まえていれば、これは承諾と受け取れる。やらないと誓うのではなく、出来ない・必要がないで語るひねくれ者なのだ。

私は息をひとつ吐いて、その答えで納得しておく。学校までは距離があるし、恐らくは大丈夫だろうとも思った。

「じゃあ、行つてきます」

革のスクールバッグを肩にかけ、最後に一度だけ鬼二十を振り返る。廊下から小声でかけた言葉に、返事はなかった。

自転車を引いてスロープを下っていくと、車道の所で見慣れた顔が立っていた。自転車と制服姿は初めて見るけれど、雰囲気は変わらない。洋介だ。

「おはよう。今行くところ？」

声をかけると、洋介は私に気が付いて携帯をポケットにしまう。

様子を見るに、私のことを待っていたようだった。

「道、不安だろ。最初だし一緒に行こうと思って」

そう言ってほんのり見せる苦笑じみた笑い方に、とても彼らしさを感じる。大きい道を通ればたぶん迷わないとは思っけれど、氣遣いに甘えることにした。

家の前は坂がきついので、二人とも自転車の横を歩く。洋介は私

の方をじつと見て、一言呟いた。

「制服、持ってたんだ」

特に深い意味のない世間話の一つだろう。ただ制服関係は、今朝の私が気にしていること第二位の話題だ。う、と口を結んで、片手で制服の端をつまむ。

「引越してから時間あったから。……ねえ、変？」

この制服を着た女子を見て二年目の洋介なら、白靴下含む全体バランスが平均的かが分かる気がした。

彼は、少し慌てた様子で答えてくれる。

「別に变じゃない。普通に、似合ってる」

似合ってる、とまで言わせてしまい悪いことをしたと思う一方で、ちよつと照れた。

……意味としては、同じようなことを今朝鬼二十に言われた気もする。こうも心証が違うのは、人柄の差だとしか言いようがない。鬼二十の事を思い出すと、頭に浮かぶ顔は意地悪な笑みばかりだった。

大きな道路に出てから、私達は自転車に乗った。

こっちは、以前住んでいた街よりも風が強い日が多い。一列で走る間は特に、洋介に何か話しかけても聞こえていない様子だった。

緩やかで距離のある坂に差し掛かると、スピードが落ちて、声は届くようになった。でも自転車に慣れていない私はかなり必死で、話す余裕が無い。体重をかけてふるふるとペダルを踏む私に速度を合わせながら、洋介は軽く笑った。

頂点を越え、下りの方は想像より傾斜がきつくて、軽快に車輪が回る。気持ちのいい風をひとしきり浴びたあと、私は隣に並んだ洋介に話し掛けた。

「部活、入ってるよね」

断定する言い回しをしたのは、ほとんど確信しているからだ。今日も鞆だけではなく、スポーツバッグも背負っている。彼はどこから見ても運動部だ。

「バスケ部」

短く返された答えが想像とずれていて、少し驚く。

「バスケって体育館競技じゃない？ 日焼けしてるから、野球かサッカーだと思ってた」

「これは、チャリ通学と自主トレで焼けた」

横目に見ると、半袖のシャツから日に焼けた腕がのびている。洋介は向かい風に負けないように、大きな声を私に向けた。

車道を挟んだ反対側を見るように言われて顔を向けると、私と同じ制服の女の子達が自転車走らせていた。皆、前の学校のテニス部員くらいに日焼けしている。

「あれくらいは、珍しくない」

そう言われて、私は今朝日焼け止めをしっかり塗ったかどうかの心配をする。今までは、駅から学校まで五分と歩かない生活をしてきた。それでも女子は皆日焼けを気にして、日傘をさす子までいた

のだ。登下校の時間は長いし、秋になっても油断は出来ない。恐るべき自転車通学と言うべきだろうか。

「部活、お前も入ったら？」

思考が逸れていたところに、意外な奨めが洋介からなされる。この一年授業でしか体を動かしていない貧相な体力は、ついさっきも披露したばかりだ。

私がうつん、と首を傾げると、洋介は提案した理由を述べる。

「あと一年あるしさ。こっちに知り合いがないなら、暇が潰れるんじゃないかと思って」

前の高校では、部活には入っていなかった。スポーツは可も不可もなく、文化部系の技術はまあ普通、という無難すぎる能力故に、興味がわかなかったのだ。

でも確かに、女子は部活のグループで固まることが多いものだ。二年目の半ばに入っていくのなら、きっかけはあった方がいいのかもしれない。

純粹に部活が好きそうな洋介の横で、女子らしい計算を働かせながら「いいかもね」と頷いた。

学校に近付くにつれて、学生の姿が増える。ときどきし始めていると、後ろから一人の男子生徒が来て、洋介に声をかけていった。それを見て、いつまでも一緒にいては彼に悪いんじゃないかと思ひ直す。

私が職員玄関に行かなくちゃと言うと、昇降口とは違う入口を指差してくれた。

自分を知っている人と離れるのに、不安はある。最後に、一応洋

介のクラスを聞いてから別れた。

「行ってきます」(2)

希望を聞かれるということもなく、私は人数のバランスを考えたクラスへ入れられた。教室は、数字だけ見れば洋介の隣だ。

学校を移ったのは初めてで、周りを取り巻く雰囲気全てひとごとみたいだった。

職員室で知らない教員達に色々と紹介をされたり、担任に「困ったことがあったら相談してね」と言われたり。始業式の間、事務員さんがお茶を煎れてくれたり。

私はその間ずっと、どこかぼんやりとしていた。

ホームルームが始まって静かな廊下を担任と歩くと、いよいよ自分は転校生側なんだと実感がわいてくる。

目的の教室以外も、廊下の私を見てざわざわと雰囲気浮き立つのだ。お調子者ポジションだろう男子が、戸のぎりぎりまで覗きにきたりもした。

私のクラスの前まで来ると、中から「どっち」「女子だ」と声が聞こえてくる。

囁かれるこちらは正直、緊張っていうレベルじゃない。序盤の振る舞いに学校生活がかかっているんだと思うと、やけに気持ちが焦った。

ウケを狙いにいけるほど器用ではないし、かといって素のままでは地味に映るかもしれない。これが私の、今朝の心配事第一位だった。

「じゃあ、入ってきて下さい」

担任の若い女性教諭の声が、廊下に向けられた。結局、緊張を解決する上手い手段は何も浮かばないまま、私は教室に入る。四十人はいるだろうクラスの全員が、私を見ていた。

えっと、まずは名前を言うのかな。と唾を飲んだところで、先生の方から名前を紹介された。あわせてお辞儀をする間にも、先生は私の出身地などを簡単に話し始める。

言うことが無くなる前にと、私はなんとか口を挟んだ。

「こつちにはおばあちゃんの家があつて、そこから通ってます。よろしく願います」

第一印象といえ、とにかく笑顔だろう。それだけが思い出されて、顔に微笑みを貼付ける。

教師の位置に立つと全員の顔と机の上が見渡せるというけれど、それは本当だった。机の上は始業式の後では何も無いけれど、細かな表情まで把握できる。珍しい編入生に期待の目を向ける人もいれば、特に表情に出す感情を持たない人もいた。

敵地というわけではないが、仲間がいるわけでもない。それをひしひしと感じながら、私は纏った笑顔を保ち続けた。

「峰岸さん、目は良い？」

「はい」

ときどきしていると、先生が私の肩に軽く手を添える。今はきつと、ドラマで一度は見た構図が作られているだろう。先生は少しだけ耳元に寄って、いたずらっぽく微笑む。

「じゃあ、後ろに席増やしておいたから、そこに座って」

大勢の視線をうけながら、私は机の間を通って席に着いた。

始業式でどんな話がされていたのかは知らないけれど、ホームルームはごく普通のものだった。

担任の森先生は英語を受け持っているらしく、まずその宿題の回収があった。出席番号順に前に並び、皆その場で軽くコメントをされる。

自由に席を立つても平気な雰囲気になったからか、順番以外の女子が何人か私の座席まで来て話しかけてくれた。

インタビューみたいな、質問らしい質問をするしつかりした子は、やはりというべきかクラス委員だった。明るくラフな雰囲気で話し、私がグループになじみそうか試すように見るのは、いわゆるギャル系の子だ。

そこでの会話では、これといった失敗はしなかったと思う。でも、劇的に仲良くなりそうな子にも出会えなかった。

私自身、学校に来た転校生の机を進んで囲むタイプではなかったのだから、当然かもしれない。私は、明日から頑張らなくちゃと強く思った。

その宿題回収のわずか三十分程度しか、自由な時間はなかった。

初日というのは、係や委員を決める話し合いがあるものだ。余計な話をする間もなく、決めるべき事を話したら、すぐに続けて帰りのホームルームが行われた。時間が押していたようだ。

今日はこれで終わりなのかと驚いている間に、クラスの大半は慌ただしく鞆を取り出して支度を始める。……周りに聞こえてきた話によると、部活動ごとに部室清掃があるらしかった。

当然私はまだ部活には属していない。見に行こうにも今日はきつと忙しくて、見学者に構う暇はないだろうと考える。

初登校だけど、今日はもう出来ることがない。私は、一人で帰ることにした。

職員用の昇降口から帰ろうとしていたら、森先生に呼び止められて下駄箱を案内された。

そちらから外に出ると、校庭と部室棟がよく見える。サッカー部がゴールを運ぶ様子は、箱庭の小人を見るようだった。

一学年の人数が前の高校より多いか、入部率が高いんだろう。大勢の人がマツトを叩いたり、物を運び出したりしていた。

……私もやつぱり、部活に入った方が良かったらうか。いくつもの小集団を見ると、気持ちはますますそちらへ傾いてきた。本来私は、流されやすく、群れの中で落ち着く普通の女子なのだ。

朝に洋介と来た道を思い出しながら、私は無事家へ帰った。学校は大きな道路沿いにあるので、曲がる角の建物さえ覚えれば、迷う心配はない。

玄関でローファーを揃えていると、微かに太ももやお尻へ違和感を感じる。「即日に筋肉痛の兆候があるのは若さの表れ」とはいうけれど、さすがに体力が無さすぎだと嘆息した。自転車通学に慣れるまでは、しばらく辛いに違いない。

居間で母や祖母に顔を見せてから、私は二階の自室に急ぐ。帰宅を始めた頃から、あの人のことが気になって仕方なくなっていた。

朝一番に解決させておいた、心配事第三位だ。家族がいる状態で鬼二十を残して行くことに不安があったのだが、少なくとも今日は部屋でおとなしくしてくれていたらしい。

部屋に入ってふすまをいそいそと閉め、鞆を机に置く。姿が見えないなと思いながら振り返ると、鬼二十はいつのまにかタンスにもたれて立っていた。

「わっ、ただいま」

少し驚いた私を笑うでもなく、腕組みをして黙っている。ちょっとした挨拶が日常にある私には、こういった自然な無視が気になった。

しかし、相手は何様・俺様・鬼二十さまといった態度の妖怪だ。不満を言う気にもならず、私は身仕度を始める。

「ちよつとごめん、着替え出すから」

タンスに寄り掛かる鬼二十に一声かけると、するりと私の横をすり抜けて、今度は机に腰掛けた。

私は取り出した部屋着を抱えて、自主的にタンスの陰へ移動する。鬼二十の主食を知って以来、むやみに肌を見せてお腹をすかされても困るなと思つた末の自衛だ。

着替えながら、沈黙に堪えかねた私は雑談を始めた。

「今日は自己紹介したんだけど、特に失敗はしなかったよ」

「そうか」

いつも通りの、情緒のない即答相槌が返る。私は制服を脱ぐ方に夢中で、たいして気にならなかった。

「教室は洋介と別になっちゃったけど、女の子の友達作らなきゃいけないし、まあいいかなって」

先に脱いだ制服をハンガーにかけ、ふすまの枠にかけておく。さすがに下着姿では落ち着かなくて、急いで上着をかぶり、ズボンに足を通す。

適当な相槌すら無いなと鬼二十の事をふと考えたら、今いる部屋の隅が更に暗くなった気がした。

「綾」

机に座っているとばかり思っていた声が背後からして、私は思い切り体を跳ねさせる。

どうでもいいことだが、たった今ズボンを上げたところだから、普通にパンツを見られたかもしれない。

「……なに？」

くだらない話であれば、前置きも主語も無くいきなり話しそうな鬼二十だ。最初に名前を呼ぶ時は大事な用件だろうと、自然に聞く体勢になる。

「前の食事から四日経った」

鬼二十は真面目な顔をして、淡々と用を告げた。

私はそれを、本当に言われるまですっかり忘れていて、つい数秒固まってしまった。カレンダーを頭に思い浮かべる。今日はたしか、木曜日だった。

「ああ……。うーん、明日寝坊するのが怖いから、明日の夕方でもいい？ その次は休みだから、私は多少負担増えても平気なんだけど」

日付を把握したらしたで、今日食事させるのは辛い気がして、お伺いをたてる。

今までは全て四日間隔だったけれど、必ずそうと決めた訳ではない。一日ずれようと、一応は一週間未満だ。私と鬼二十が良いと思えば、三日でも六日でも問題はないだろう。

私は気楽に申し出たのだが、鬼二十は口を結んだまま、目の前の私をじっと見下ろしている。

睨んでいるわけではない。眉間にしわも寄せていない。いつもの仏頂面ではあるが、何だかこの雰囲気は息が詰まった。

「あの、良い？」

私は不安になって、もう一度問い掛ける。

それにすらも鬼二十は返事をせず、この日は姿を消してしまった。

「行ってきます」(2) (後書き)

2章終わりです。

1章が出会いから、狭い環境で鬼二十を選ぶまで。

2章では友達ができ、学校に通い始め、綾の世界が広がりました。

それを踏まえて、以降での関係性の変化を楽しみにして頂けたらいいなあと思います。

学校（1）

二日目の朝も、洋介は私を待っていてくれた。

私も別に、遅刻を心配するような時間に出ているわけじゃない。ただ彼の方が早いのだ。

嬉しい反面、一人でも平気なのに何だか悪いなという思いもある。でも洋介の立場になって考えてみると、自分から誘った手前「今日からは別々に行こう」とは言い出しづらいのかもしれない。そう考えるとかなり納得がいったので、私の方からそれとなく機会を作ることにした。

「再来週から朝練始まるから、じゃあそれまで」

その話は彼のこの一言で収束して、私達はあと少しの間だけ一緒に登校することになった。

自転車に乗ってからは、ほとんど会話は出来ない。今朝は、どんな部活があるのかを運動部中心に聞いて、駐輪場で別れた。

「おはよう！ 峰岸さん！」

クラスに入るとすぐに、数人の女子がやけにきらきらした面持ちで私を取り囲んだ。昨日少しか話したギャルっぽい子と、そのグループの子達だった。

私は内心驚きながら、とりあえず挨拶を返す。その後で、何か話したそうにしているその子達を促した。

彼女達は互いに目配せをして、やがて一人が口を開く。

「峰岸さんって、芦川洋介君と知り合いなの」

瞳を輝かせていたのは、噂話の種になる好奇心だったらしい。

こんな事を尋ねられるということは、今朝登校するところを見られたんだろう。やっぱり異性の友達とは、こういう面倒もある。

彼女達がどういう答えを期待しているのかわからないので、私はここにこしながら無難な答えを返した。

「家が近所で、最近知り合ったんだ。学校までの道教えてくれたの。親切だよな」

おおー！ とか、ええーだとか、楽しげなりアクションで場が沸く。最初に質問したのとは別の子も、初めて口を開いた。暗い茶色の巻き髪を下で二つに結んだ、可愛い子だ。

「近所？」

「すごく近所。歩いて一分くらい」

私の答えを聞くと、超近所だね！ と再び私の周りが華やいだ。

彼女達みたいなタイプの子とは今までも話したけれど、グループに入ったことはない。こんな風に色んな噂に興味を持つてはしゃいだり、大きな声を出すほど元気でもないからだ。

別にその差が嫌なわけではなくて、これはテンションの違いの話なのだ。

……すごく具体的に例えるなら、彼女達とはときどき中庭にお弁当を持って行って、ピクニックごっこをするタイプ。恋の話が大好き。私がいるようなグループは、毎日同じ教室で昼食を食べて、雑談

するうちに昼休みが終わるタイプ。恋の話は、するなら放課後寄り道しながらだ。教室で互いに耳打ちしての、好きな人暴露大会なんて程遠い。

枯れてるとまではいかないと信じているけれど、彼女達ほどはきらしていない。

そんな私は、実は今少し落ち着かなくて困っていた。場違いな空気をほんのりと肌で感じている。予鈴も鳴りそうだけど、私は入口で鞆を持ったままだ。

洋介は学年で多少目立つ方の男子らしい。たまたま彼女達には共通の知り合いがないから、色々聞いてみたかったのだそうだ。

それをきっかけに、今度は話題が私に移った。

その場には初めて話す子が数人いたので、簡単な自己紹介がぽつぽつと始まる。峰岸さんじゃ堅くない？ と一人が笑いながら言うて、私はその四人から綾ちゃんと呼ばれることになった。

幸い、この学校は校章と名札が一緒になっている。しばらくは名前を覚える時間がありそうだ。

「なになに、私もまぜてえ」

そこへ突然、後ろから両肩に誰かがのしかかった。振り向く前に、ショートカットの女の子が笑顔で私を覗き込む。体育大好き、といった印象の子だった。

「あれ、予鈴前に来た」

ギャルの子達にそう茶化されながら、彼女は私の横を抜けてくるりと向き直る。名札を見たら、ただでさえ掠れた文字がひよこのシ

ールで埋めつくされていて、苗字しかわからなかった。

私が名札を見ているのに気付いたのか、彼女はニツと笑う。

「峰岸さん、私、鈴木日奈^{ひな}。バレー部！」

挨拶が終わるとすぐに、彼女は私の手を握って上下に振った。ギヤルの子達はその横で、自分達はダンス部だと教えてくれる。

この流れに乗って「私も部活動の見学をしたい」と言おうとしたところで予鈴が鳴った。

先生が教室に入ってきてから、みんな席に戻っていく。

昨日の今日で、私はまだ座席と人が結びついていなかった。ギヤルの子達は前の方の席で、バレー部の彼女は私の斜め前だ。

授業中、その日奈ちゃんが気持ちよさそうに眠るのを何度か見た。それどころか昼休みまで半分以上寝ていたので、私は気になって時々観察する。

結果的に五限の十分前に目を覚まして、あわててパンを食べていた。周りの子が「詰め込むねえ」と声をかけると、食べながらこくこく頷く。

彼女はなんだか、見ていて可愛い。私は少し興味を持った。

バレーボールなら、授業で簡単なことはやっている。サーブくらいなら入るけれど、部活はどうだろう。

色々試そうとは思っているので、今日の放課後は彼女に声をかけようと思った。

まだ昼間が長い季節だけれど、私が家に着く頃には夕陽が差して

いた。

昨日の登下校でじんわりと筋肉痛になっていたところに、今日の校舎五周だ。帰りの自転車もかなり辛かったが、家についてじっとしてからの方が痛みが気になった。

見学は快く了承してもらったけれど、やはり運動部は大変だ。

初心者の私は、一年生の基礎練習と一緒にやった。走って筋トレをして、久しぶりにくたきただ。

階段を上がると太ももがじんじん痛む。私は重い足どりで自分の部屋へなだれ込んだ。

「あつ脚痛い……これやばい」

鞆も足元に放り出して、一直線にベッドに上体を預ける。それからしばらくぼーっとしていると、ふすまが閉まる音がした。

そつえば開けっ放しだったなと考えた次には、閉めたのは母か鬼二十かどちらだろう、と悠長に構える。

私は億劫に感じながらも、後ろへ顔を向けた。

夕陽の赤いフィルターが掛かった室内に、同系色の鬼二十が立っている。この色合いはきれいで好きだな、と思わずどうでもいいことを考えた。

鬼二十は何か言いたげな顔で、ベッドに伏せる私を見つめる。向こうが何も言わないので、私は小さく手を振って「ただいま」と呟いた。

その言葉は望むものではなかったらしく、両目が少し細められる。

「何、どうしたの」

尋ねると、微かに眉がひくりと動いた気がした。しかしその表情を気にかけるより前に、鬼二十が口を開く。私は自然と、そちらに集中した。

「がっこうは、そんなにする事があるか」

その言い方には、どこかあやふやな印象がある。私がまだろくな説明をしていないから、恐らく鬼二十は学校が何かすら知らないのだ。

昔の言葉に置き換えたところで、概念を知っているかが怪しい。教育など、妖怪には関係なさそうだ。

私は今日も、きちんとした説明は諦めた。

「朝から昼過ぎまで勉強して、そのあとは部活……えっと、やりた
い人が集まってスポーツ、じゃない、運動をするの。ボール……じ
やなくて、こう、球蹴りとか？」

説明に横文字を使えないせいで、私まであやふやな喋り方になっ
てしまう。球を蹴る以外の競技は、全て球遊びとしか言えそうにな
い。

バレーボールをどう説明したものかと悩んでいると、鬼二十はそ
れを待たずに割って入った。

「で、体力は残っているのか」

唐突だなあと思いつつも、私は鬼二十の方に向き直って首を横
に振る。脚は畳に投げ出して、背はベッドの脇に預けきった。

「久しぶりに沢山動いて、もうすぐにでも寝れそう」

苦笑まじりにそう言うと、鬼二十はゆっくり数歩近づいた。私を見下ろす顔は、ちょうど夕陽に下半分だけを照らされて、目がよく見えない。

「本当に今日でいいのか」

反射的に「何が？」と言いそうになって、口から え、と声もれた。

私はそこでやっと、昨日の約束を思い出したのだ。取り繕おうにも、忘れていたのは傍目に見てもバレバレだ。鬼二十は大袈裟なくらいに、信じられないといった顔をした。

「お前が言ったことだろう」

「そうだね。そうだった……」

思い出したからには、私は約束を守ることにする。疲れてはいるけれど、明日にしたって筋肉痛は残るし、負担も増すだけだ。

私がウェットティッシュを手には支度を始めたのを見て、鬼二十は傍に膝をついた。お互い慣れたもので、流れ作業のように拭き終えた私の腕をさらっていく。

顔を近付けて、寸前のところで鬼二十はぴたりと動きを止めた。

その様子を見ていた私を、黒目が一度じろりと見る。

「私には、ますます分からん」

言い終わる頃には、鬼二十はもう視線を伏せていた。いつもの感触を腕に感じながら、その光景を眺めるのは気まずくて目をそらす。

……私に言ったんだろうか。

学校（2）

この日私は、濡れてしまった靴下を洗面所で脱いでから部屋に戻った。

坂道から私の部屋を何気なく見上げたら、窓辺に人影がある気がした。だから今、鬼二十が既に姿を現していても少しも驚かなかった。

「ただいま」

横顔に声をかけて、机に鞆を置く。鬼二十はいつも通り腕組みをして、ただ私を見つめ返すだけだ。

私の生活習慣は夏休みと随分変わったけれど、鬼二十は良くも悪くも変わらない。基本的に私の部屋で待機して、数日に一度生気を食べる。会話をするのも、変わらず私が話し掛ける時がほとんどだ。一緒にいる時間が減ったせいかな、私は以前より鬼二十に微かな距離を感じていた。

用が無くても挨拶はできる。でも彼はそれに返事をしないのだから、意味はない。会話の始まりが潰れると、なんだか話したすことも躊躇われた。

鬼二十にとって、部屋の主が外出しようがしまいが、どうでもいいのかもしれない。だとしたら、せっかくの風変わりなルームシェアも味気無くなりそうだと一人思う。

私がふと窓の外を眺めると、視界の端で鬼二十もそちらを見る気配がした。

今日は朝から、残暑を遮って雨が降った。

学校までは、自転車で三十分だ。これには途中の徒歩分も多少含まれている。それでも、最低十五分は自転車に乗っているはずだ。だから雨は、とてつもなく朝の予定を左右する。

寝起きでばやけた頭が、雨音を聞いてゆっくりとそれに気が付いた。——自転車が使えないなら、いつもより早く家を出ないといけない。

慌てて支度を済ませて、私はなんとか五分だけ早く家を出た。学校まで歩いて行ったことはないけれど、恐らくこれでは遅刻ぎりぎりになるだろう。

それなのに、いつも洋介が立っているあたりに傘は見えない。車道に出て坂を見上げると、焦る様子もなく彼が下りてくる所だった。挨拶をしてから、私は時計を確認する。いつもほとんど変わらない時間だ。

「雨の日って、いつもの道を歩きで行くんだよね」

間に合うんだろうか、とそわそわする私とは対照的に、洋介は落ち着いていた。彼は傘の下でこちらを見て、歩き出しながら話す。

「別に俺は歩きでもいいけど、今日はバス停案内するよ」

洋介の余裕のわけを知って、私は当たり前前に驚いた。

事前に調べたつもりだったので、それは初めて聞く情報だった。たしか大通りに出ても、バスは駅方面行きしかなかったはずだ。

「バスあるの？」

「ちよつと道それるけど、そこからは学校まで十分あれば着く」

彼が言う通り、バス停は大きな十字路を学校とは反対に歩いて二分ほどの所にあつた。バス停までの徒歩の時間を考えると、晴れの日は自転車の方が便利だろう。

男子生徒の中には、雨でも自転車に乗る人が結構いるらしい。私は大人しく、今後も雨の日はバスに乗ろうと思つた。

バス停には数人が雨をしのげそうな屋根がある。今朝は、ここには私と洋介の二人きりだ。

それぞれが傘の水滴を飛ばし、畳み終わると辺りは静かになる。屋根を打つ雨と、前を車が通る音だけがやけに大きく聞こえた。

なんとも言い難い無言の時間が続く。

「……あのさ、聞いていいのかわからないけど」

その中で洋介がぼつりとこぼした言葉を、私はすぐさま拾つた。知り合つてからそう長い仲ではないので、何でもいいから会話を続けられたのだ。

今思えば、そんな前置きを聞いたら、少しは何か想像すべきだったのかもしれない。

「この間の、ツノ生やした奴ってさ」

私はあからさまに動揺して、体がひくりと揺らいだ。

生える、なんて言い方をされると、正体がバレたのかと焦る。も

し今お茶でも飲んでいたら、きつとむせてしまっただろう。

しかし今は考える余裕がある。私の知らないところで鬼二十の情報が洩れるわけがないので、確信は無いはずだ。

一応用意しておいた言い訳を、私は精一杯の平常心で口にする。

「ああ、イトコの、演劇部のお兄さん？」

「お前、嘘下手だな……」

洋介は驚きすら混じった様子で、一秒もそれを真実だとは思ってくれなかった。

同居と服を同時にごまかすにはこれしかないと思ったのだが、見抜かれてしまうなら茶番でしかない。

逆にどんな設定ならリアリティがあるんだろう、と私は困り切って隣の洋介を見上げた。彼はほんの少し私の顔を覗き込んで、真面目な顔で二、三秒見つめてくる。

「人間じゃ、ない？」

心臓がギュツと締め上げられる感じがした。

思わず洋介の方を見て、私はまばたきを繰り返す。確かに鬼二十の格好は普通ではないけれど、人間じゃない存在なんて、いないと考える人がほとんどじゃないだろうか。

「……あの、なんで人間じゃないって、思ったの？」

私はぐるぐると渦巻く考えを抑えて、かなりの覚悟をして洋介にそう尋ねた。しかしそれは、すぐに覆される。

「え、マジで？」

彼の顔に表れたのは、困惑と少しの焦りに、苦笑い。……本気で言った訳ではなかったのだ。

私って結構バカなのかもしれない、と軽く落ち込む。その間も洋介は、本当にそうなのかとしきりに確認していた。

一度実際に対面しているだけに、私が何も言えなくなっている様子すら、この場では肯定になった。

「妖怪？ ……やおよろずの神、みたいなやつ？」

洋介は言葉にも顔にも疑問符を浮かべて、私に尋ねる。

私だって鬼二十と出会ったのは一ヶ月前だし、にわか知識しか無い。一度首を傾げてから、間違いではなさそうな事だけを話した。

「本人は九十九神だって言ってる。消えたりできるし、本物だと思う」

それっきり、私たちはまたしばらく無言になった。

洋介は今聞いた話を反芻しているようだったし、私は私で、今後は絶対にこんな状況を招かないと固く誓っていた。

下手をしたら妖怪がどうか言っただけで、私が危ない子だと思われかねない。

そうでなくても、聞かされた相手にも迷惑だろう。現に洋介のことも、随分困らせている。

黙っているうちにバスがやってきて、私は彼に続いて奥の座席に座った。

バスが走り出した頃、そっか……と洋介は独り言のように言う。私は一応それをうけて、他の乗客には聞こえないよう、小声で返し

た。

「信じてもらえると、私も楽だけどね。そうとしか説明できないし……」

実際に鬼二十に妖怪っぽいことをしてもらうとか、証明方法はあると言えばある。ただしこの場では、私のいい加減な説明が限界だ。これに対して洋介は、嘘だとは思っていないことを伝えてくれた。

降りるバス停は、学校が見える場所にあった。広い歩道には大勢の生徒が歩いていて、傘がカラフルだ。

「それって、家にいさせて大丈夫なもの？」

不意に洋介が私に尋ねる。それというのが鬼二十のことだと思に至るのに、数秒かった。

あの人がそういう危惧の対象だったことを、私はしばらく忘れていた気がする。最初の一週間こそ謎が多かったけれど、もう目的は知っているのだ。鬼二十は生気を奪う以外、乱暴はしない。

真面目に心配してくれているらしい洋介に、私はなるべく明るく頷いてみせた。

そうして今朝は、先送りにしていた洋介への説明をなんとか終えた。

私が神経を擦り減らしたのも知らないで、鬼二十はベッドに腰を下ろす。座りたかった場所を取られてしまったので、私は勉強机の

椅子に座って、くるりと向きを変えた。

「今日はね、踊りをやってきたよ」

相変わらず、球蹴り以外のスポーツの説明は思いつかない。なので、ダンス部なら言い表せるぞ、と私は得意顔だった。

バレエ部は、はっきり言って無理そうだという結論になった。かなり練習熱心な部活で、一学年下も大会に向けて忙しそうなのだ。ただ、一度見学に行ったのをきっかけに、日奈ちゃんが良くしてくれるようになった。

彼女は特定の人と一緒にいないタイプだったみたいだけれど、クラスの子達と広く話せる。更にバレエ部の副部長で、会議を通して他の部活の事情にも詳しくかった。

今日は日奈ちゃんを介して、ギャルの子達が入っているダンス部を体験してきたのだ。お喋りが多かったけれど、なかなか楽しかった。

鬼二十は踊りと聞いて何を想像したんだろうか、訝しげな顔をして「楽しそうだな」と全然楽しくなさそうに呟く。

「すごく、楽しくなりそう」

私はその様子をあまり気にかけず、椅子をもう一度回した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0330w/>

鬼の面

2011年12月17日03時46分発行